相羽ういはの憂鬱

鯖太郎

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

高校一年生の黛灰は師匠の思いつきで地元の公立高校に通うことに。

通信制の高校に行くつもりだった黛は嫌々普通の高校生活を送れるよう目立たないようにするつもりだったのに…

ほとんど思いつきのため涼宮ハルヒ要素はほぼございません。ハルヒが見たいという方はブラウザバック推奨致します。

不定期更新につきかなり間が空くことがあるかもしれませんがご了承ください。

目次

相羽ういはの憂鬱Ⅰ①　1
相羽ういはの憂鬱Ⅰ②　13
相羽ういはの憂鬱Ⅰ③　27
相羽ういはの憂鬱Ⅱ①　39
相羽ういはの憂鬱Ⅱ②　52
相羽ういはの憂鬱Ⅱ③　62
相羽ういはの憂鬱Ⅲ①　73
相羽ういはの憂鬱Ⅲ②　81
相羽ういはの憂鬱Ⅲ③　91
エンドレスサマーⅠ①　100
エンドレスサマーⅠ②　111

相羽ういはの憂鬱Ⅰ　①

どーも。

さて、突然だけど君たちはクリスマスやサンタといった類をいつまで信じていた？

幼稚園？小学生？まだ信じてる、というような人はピュアなのかバカなのかこちらとしては判断に困るんだけど、少なくとも俺は最初から信じていなかった。

いや、多少は信じていた時期もあるのかもしれないけど、サンタという存在を認識したのとほぼ同時に師匠に現実を突きつけられた。

「かいくん、サンタさんってまだ信じてる？」

当時２歳だった俺にクリスマスプレゼントと称してパソコンをプレゼントした師匠は確かこんなことを言っていた気がする。

そもそも２歳児にこんな質問をする師匠はちょっとおかしいような気もするが、まあ、師匠はこんな人だ。

そもそも施設暮らしの俺にサンタの存在を信じろという方が無理があるんじゃないかな。基本的にはプレゼントって施設の人からの手渡しだし、だいたいみんな貰うもの一緒だから。いや、別に哀れんで欲しくてこの話をした訳じゃない。

話を変えよう。

君たちはいくつになるまでテレビでやる心霊番組や超常現象といった類を信じていた？

これもまた、師匠に吹き込まれたせいで小学生になる頃にはあの手の番組が全部嘘だと教えられた。

さっきから師匠、子供の頃の俺に何を吹き込んでたんだろうか。

まあ、それはいいんだけど、少なくとも俺は小学生に上がる頃には非日常的で非現実的なものは大概存在していないって風に認識していた。

けど、俺も男の子だ。そういった類の存在がいたら、なんて考えることもある。とは言っても有り得ないとわかっているし、想像の中で留めている。

そうして俺は、この世界の普通さと師匠から貰ったパソコンにかなり慣れてきた中、普通の高校生になり、ソイツと出会った。

◇◇◇◇◇◇

そもそも俺は出不精だ。

必要のない外出はしたくないし、高校は通信制のとこにしようと思っていたが、師匠

や施設の人達にせっかくだから近くの公立高校に通った方がいいと言われ渋々1番施設から近い高校を選んだ。

何がせっかくなのか分からなかったが、師匠の言うことだし合わなかったらその時はその時だ。じわじわ不登校になってそのまま通信制に転校すればいい。

しかし、それにしても下見もしなかったから位置情報アプリで1番近い公立高校と言うだけで選んだせいで、この坂の存在は知らなかった。

もし知っていたら絶対に北高に行こうなんて思わなかったと思うし、すぐ近くの私学にしておけばよかった。

そもそも私学に通うお金はないからそんなことはできないし通わせて貰っているだけありがたいんだけどね。

夏や冬この坂道を登ることを考えると今のうちからフェードアウトの準備を始めた方がいいかもしれない。

そんなことを1人で考えながらなんとかたどり着いた教室で大概最後の方になる自己紹介の自分の番が来るのを待ちながら退屈な時間を過ごすことになるだろうと思っていた矢先だった。

背筋をピンと伸ばしたやけにハキハキとした動きで彼女は高らかに宣言した。

「ういはろー!東中出身の相葉ういはです!面白い事が大好きなので非現実的な体験を

したり、非現実的な存在の人は私のところに来てくださいね！」
やけにアイドルじみた所作と顔立ちから発された言葉はあまりにも衝撃的過ぎた。少なくとも俺は普通に過ごしたいしなんなら目立たずにフェードアウトしていく予定だったから関わらないだろう。そうタカをくくって忘れることに努めた。
「アウスアウマウです……えぇ……」
あんな挨拶するからほら、次の子困ってるじゃん…やけに頭の大きなシルエットの銀髪の子。
「アルスさん顔大きいですね！面白いですー！」
「はぁ??何言ってんだおめぇ！」モッチーン
どうやらあの銀髪の子はアルスと言うらしい。そしてういははアルスをターゲットにしたらしい。こうなったらういはのターゲットがわざわざ席の遠い俺に向くことはないだろうし一安心だろう。
ようやく俺の順番が回ってきたが施設のことや両親のことには触れずとにかく無難に、どこにでもいるモブのような挨拶を済ませた。
自己紹介が済んだら即席替えが始まった。うちの担任はなかなかせっかちなのかもしれない。せっかくういはから離れた席だったが、こればかりは仕方がない。少しでも静かなとこになるよう祈りながらくじを引いた。

◇◇◇◇◇◇

知ってた。俺の運のなさは。

少しでも静かなところにと願った結果がこれである。隣にはおもちゃを目の前にした犬のように目を輝かせたういはがこちらをじっと見つめてくる。

黙ってればアイドル並みの容姿をもったういはがこちらを見つめてくるのはどうも落ち着かない。ただ、口を開けば何を言い出すか分からない時限爆弾的な怖さがある。このまま黙っていてくれたらありがたいんだけ…

「黛さん！」

ダメだった。

「何？」

「黛さんってめちゃくちゃ細いですね！ポキッと折れちゃいそうですー」

彼女の第一声がこれだ。サイコパスかなにかだろうか。

「出不精だからね」

「黛さん！」

「何？」

「一緒に部活やりましょう！」
　何がどうなってこうなるのか全く分からない。この流れだと俺の骨をポキッと折る部活になりそうなんだけど。
「ほら、アルスさんもいますし、楽しい部活になりそうじゃないですか！」
「うぇっ、わ、私？なんで私は入る前提になってるのさ…しかもなんの部活だよ…」
　どうやらういはにはもうアルスが一緒に入部するのは決定事項らしい。
「それは今から考えるので大丈夫です！なんなら私、部活作る予定なので！」
「ますます不安だよぅ…」
「ほら、アルスも困ってるみたいだし1回ういはさ、順序だてて詳しく説明してよ。あ、アルスって呼んで大丈夫だった？ういはも呼び捨てで大丈夫？」
「うん、いいよー。私もまゆくんって呼ぶね」
「大丈夫です！」
「で、ういはは部活を作って何をしたいの？」
「楽しいことです！」
「抽象的すぎるでしょ」
「具体的な内容はないんですかね…」
「それは活動しながら見つけていけばいいんじゃないんですか？」

「まゆくんどうする？もう不安しかないんだけど」
「いや、逆にこの状況で不安を感じない人がいたらその方がおかしいよ」
「ほんとだよ…」
　これだけ言われてもういははニコニコしてるし何考えてるのかほんとわかんない。アルスと何度も顔を見合わせては怪訝な表情をうかべているがういはには何処吹く風と言った感じだ。
「そもそもういはさ、部活作るには部員が5人必要なのと活動内容を先生に承認してもらわないとダメなの分かってる？」
「え、そんなのあるんですか？」
「知らなかったんだぁ…」
「部活作ろうとか言うからちゃんと調べてきてるのかと思ってた…」
　どうやらういはは1度決めたらとりあえずやってみるタイプらしい。計画性とか根回しといった言葉は彼女とは無縁だろう。
「んー…じゃあ1人ずつ新入部員候補呼んでこよう！それなら何とかなるでしょ？」
「いや、でも活動内容も分からない部活にホイホイ来る方がおかしいって…」
「あ、黛さん友達少なさそうですし5人いれば大丈夫なので黛さんは頑張らなくても大丈夫ですよ？」

めちゃくちゃ煽られた。
「いや、俺だって2人くらい簡単に部活に連れてこれるけど？」
「じゃあお手並み拝見といきましょうか！」
「まゆくんもしかしてちょろい…」

◇◇◇◇◇

どうしよう。
施設暮らし長いから小さい子との接し方は分かるけど同年代ってどうやって話しかければいいんだろうか。
数分後、俺は中学校の先輩2人に声をかけることにした。
「桜さん、久しぶり」
「おぉーまゆ！通信制のとこ行くって言っとったからもう会えんと思ってたわー！」
久しぶりに会った桜さんはピアスが空いており、当然だが大人びた雰囲気が出ていた。
「まあ、色々あってこっちに来ることになった」
「そうなんや！また一緒にマ〇クラしよや！」

桜さんとは中学の頃はよく同級生の明那と3人でマイクラをして遊んでいた関係だ。明那は別の高校に進学したため離れてしまったが、また今度通話しながらマイクラを遊ぶのもいいかもしれない。

「是非。ところで桜さん今部活とか入ってる?」

「いや、入ってないけどどうしたの?」

「話せば長くなるんだけどさ、簡単に言うとクラスの人が部活作るから人を集めてくれって頼まれてて」

「へぇー面白そうやん!で、なんの部活なん?」

「それが…まだ決まってないらしくて」

「それはなかなか面白そうな子やね…あわよくばサンプルに…」

「何か言った?」

「いや、面白そうやし入ってみようかなって!」

「入るんだ…了解。伝えておくね」

思ったよりすんなり桜さんが了承してくれた。本当にいいのか心配になってきたけど、これでとりあえずういはに煽られる筋合いはなくなったんじゃないかな…そう信じたい。

◇◇◇◇◇◇

２人目だが、できるならば極力声をかけたくなかった。
というかよっぽどの事がない限りは誘いたくない。
１つ目の理由として、所属している教室が遠い。そんな理由で、と言われても困るが、そもそも出不精の俺が学校に来ていること自体がなかなか頑張っていることだと思う。それなのに自分のため以外、なんなら初対面のやつのためにわざわざそこまで言ってなにかするという行為がめんどくさいのだ。
２つ目。確実にめんどくさい事になるのが目に見えてるからである。俺と彼女は腐れ縁というかなんというか、常にお互いに煽っていないと気が済まない間柄で、このようにわざわざ教室まで出向いてなにかお願いをするとなると確実にめんどくさい事になる。ただでさえ肉体的に疲れているのに精神的にも疲れる作業をしに行かねばないというのは非常に嫌なものがある。
こうやって言い訳をグチグチあげている間に着いた。着いてしまった。
「リリさん」
「どうしたんですか？黛さん」
「部活に入って欲しい」

「へぇー？ほぉー？はぁーん？」

やっぱり。

「黛は、わざわざ遠くの教室までやってきて、それまでして私と一緒に部活したいんですかぁ？」

非常にうざい。

「いや、そういう訳じゃないんだけど」

「ん？じゃあなんで黛はこんなとこまで来たのかな？ん？優しい優しいリリ先輩が聞いてあげようか？」

グーで殴りてぇなぁ…

ただこうなることはわかっていたのでこちらも無策で来た訳では無い。

「この前剣持さんと伏見さんと3人でなんかトリｇ…」

「ごめん。ほんとごめん。黛、私が悪かった。条件を聞こうじゃないか？な？わざわざここまで来てくれた可愛い後輩の願いを無下にするほどみｒ…私は薄情者じゃないですから。ね？」

この前なんか近くの公園で3人でやってたのを偶然見かけたので脅し、もとい説得に使わないわけがなかった。珍しく出かけた日にこういうのを目撃するとどうも気分がいい。

「助かる。まあ、こういう事情があって…」
簡単にういはと出会ったこと、部活を作ろうとしていること、活動内容はまだ決まっていないことを簡潔に話した。
「へぇー、なんか面白そうじゃないですか。いいですよ。私もそれ参加します」
リリさんはこうやって普通に話している分には優しくって気さくな、やけに同性に人気の高い先輩なのだが、どうも俺と話す時には急にクソガキになる。俺としてはこの距離感は嫌いではないし、むしろ好ましいと思っているのだが、めんどくさい時もある。今日みたいな時がまさにそれだ。
それはともかく2人集めて何とか5人揃えたのであとはういはに2人を紹介して部活をたちあげる書類を提出するのみだ。

相羽ういはの憂鬱Ⅰ　②

「とまあ、俺が連れてきたのはこの2人だね。」
翌日、放課後に集合と言われていた俺は呼んできた2人の先輩の前に立ってういはに得意げに言い放った。
「黛さん、ほんとに友達いたんだ…」
「ごめん、まゆくん、私も無理だと思ってた…」
アルーマル、お前もか。ちょっと無理があったかもしれない。
「頭でっかちなのはアルスだけだよ。」
「はぁぁぁぁぁ?お前ぇ、言っていいこととよぉ、悪いことがあるだろぉがよぉぉぉ」
ドコドコドコドコ
よし。

◇◇◇◇◇◇

「で、ういは。一応これで5人集まったから正式に部活動として申請できるようには

なったんだけど、これからどうするかって言うのは考えて…」
「どうしましょうか黛さん！」
「ないんだね。」
「とりあえず部長は私でしょ？で、アルスさんが副部長、黛さんは…なんかパソコン得意らしいので雑務でお願いします♪」
　俺が雑務なのと、ういはが部長をやるのはともかく、アルスが副部長なのは何故だろうか。あいつにできるのはういはに引っ張り回されるくらいなのに。あと既にういは、俺が連れてきた2人のこと忘れてるんじゃないかな。
「え、なんで私が副部長なの？」
「ほら、アルスさんって顔が広いじゃないですか。あはは！」
「ねぇ、ういはちゃん私になんか当たり強くない？ねぇ？」
　ういはがアルスをいじり、アルスはそれに元々でかい顔をさらに膨らませて怒る。それを見てういはが笑う。
　これがここ数日で出来上がった鉄板の流れらしい。
　そんな小競り合いをする暇があるなら早く部員の紹介をしたいんだけど…アルスはともかくういはは新入部員候補のことは完全に忘れてるような気がする。
「あのぉー、黛さん、私たちこれ何待ちですかね…」

「あぁー…ういは、この2人の紹介まだなんだけど。」
「あ！忘れてました！すみません、自己紹介をお願いします♪」
「私たちやっぱり忘れられてたんやね…桜凛月です！よろしくぅ！」
「どうも、夕陽リリです。黛とはなんというか、腐れ縁ってやつですかね。よろしくお願いします。」
「はじめまして！相羽ういはです！桜先輩と夕陽先輩ですね！」
「アウスアウマウデス…」
　ういはは初対面のふたりに物怖じせずガンガン行く姿勢は相変わらずだがアルスはどうした。フグみたいな顔しやなって。アルスの滑舌が完全に溶けてるしういはは…もうほんとに分からない。
「ところで桜先輩と夕陽先輩は何か面白い方たちだったりするんですか？魔法とか超能力が使えたり、未来人だったり、宇宙人だったり！」
　ヤバいやつだと思ってたけどういはがここまでやばい人だとは思っていなかった。さすがに高校生にもなるとそんな存在を信じるほど…
「あはは…ちょっと心当たりはないねー」
　え、桜さんもしかして？
「うぐ……私も知らないですねぇ…」

え、リリさんもしかして？

…いや、そうはならないでしょ。

「う、ういはちゃん？どうしたの急にさ？」

なるんだ。てかアルスもなんだ。

俺の周り変な人しかいなかったじゃん。いや、さすがにそんなことないでしょ。師匠…は俺が言うのもなんだけど変わってる。２歳の俺にパソコン与えるとか俺ならしない。

ハヤトさんは…最近代表取締役とかなんかに就任したからそろそろ大人になるかと思ってたけどこの前ゾイドのフィギアで『これ凄くないですか!?黛さん、これ凄いですよ！』ってはしゃいでたあたりまともじゃない。社員にあの姿見せられるんだろうか。

…俺の周りやばい人しかいないじゃん。残ってるのは…そうだ、施設の人達は優しいし大丈夫かな。今日お菓子でも差し入れしよう。

「んー…残念です…でも黛さんの知り合いっていう…なんというか、枠組みだけでなんだかとても面白そうなので入部を許可しましょう！」

「ういは、それどういう意味？」

「え、黛さんの知り合いってワードがもう面白くないですか？え、いたんだ!?みたいな感じで！」

ちょいちょい失礼なんだよね、この子。無自覚っぽいのが余計にやばいんだけど。
「それでさ、相羽…さん？」
「ういはでいいですよ！」
「ういはちゃんはさ、どういう部活を作りたいの？」
「あ、それうちも気になっとったんよー」
「実は私も全然知らないんだよぉ…」
そう言って3人は俺の方をむく。なんで？
「俺もういはに何も聞かされてないよ。みんなと同じだから。俺が1番気になってると言っても過言。」
「過言なんだ…」
「過言だね。」
「で、ういは？結局やりたいことって決まったの？」
「何言ってるんですか黛さぁーん？それを今から決めるんじゃないですか！」
「ノープランってことだね。了解。」
「なんかだんだんういはちゃんのこと分かってきたわ…」
「ごめん、私全然わかんないんだけど」
「いやぁーあはは…分からんかったん私だけじゃなかったんやね…」

俺と多分アルスもこれから先、この無自覚サイコパスに振り回される未来が何となく見えた気がした。
「ういは？そもそもさ、部活作るってなったら学校にプラスになるような活動内容を考えないと行けないんだけど分かってる？」
「地域社会に貢献するーとか学生生活を応援する、みたいなのでいいじゃないですか」
「なんかういは楽しいことしたいって言ってた割には普通だね」
「そんなの建前ですよ建前！」
「ういは建前とか使えたんだ」
「それぐらいできます！」
ういはは思ったよりも知性があるらしい。
「で、本音というか実際の活動内容はどんな感じにするの？」
「そこが大事だよねぇー」
「部室でゲームしたりお話したりあとは色々イベント的なことしたいですね…あとは…」
多分そのゲームとかイベント的なこととやらの準備はアルスと俺がやるんだろうな。
「ごめん、ちょっと質問なんだけど」
「はい、夕陽先輩、どうぞ。」

どうやらういはは議長になったつもりらしい。
「それ部活でやる必要あります？」
「はっ！…確かに…」
ういははやっぱり脳筋らしい。
「黛さん今なんか失礼なこと考えたでしょ！」
ういははニュータイプらしい。
さっきから俺ういはは〇〇らしい。しか言ってない気がする。ほぼ初対面だから仕方ないね。
「いや、何も。けどなんでういはは部活にしたいって思ったの？」
「いや、なんか放課後に学校でグダグダしたり遊んだりするのって何か楽しそうじゃないですか！」
「それなら部活じゃなくてもできるじゃん…」
「アルスさんは分かってないですねぇー」
「何がだよぉう」
「部活って響きがいいんです！」
もういっその事勝手に〇〇部って名乗って普通に空き教室とか誰かの家とかに集まって遊べばいいのに。

「やったら○○部って名前付けて勝手に私たちで活動したらいいっちゃない？」
「でもそれだと部室使えないから何かおもしろみに欠けるんですよね…せっかく活動するなら部室に集まって、っていう感じの？」
「じゃあ私が今入ってる超常現象研究部部員私しかいないので残りの４人でそこに入部するのはいかがですか？いいアイデアだと思うんですけど…」
「リリ先輩天才じゃないですか!!」
　ういはの呼び方が夕陽先輩からリリ先輩に変わってる。相変わらず距離の詰め方が大型犬とかその辺に似た何かを感じる。今もリリさんにすりついてるし。
「っていうかリリさんなんでそんな部活入ってたの？」
「ははは…いや、親しい先輩がそこに在籍しててその人に誘われてって感じで…まあ、なりゆきですね。」
　恐らく伏見先輩だろう。この前もトリガー（笑）とかやってたし。
「でもその先輩が卒業してしまって私の代に入部した人はいなかったですし１個うえの先輩もいなかったので現在部員は私１人。どうです？なかなか魅力的じゃあないですか？」
「リリちゃんええやん！」
「じゃあ決定ですね！これから私たちの活動内容は超常現象研究部に入部して、世界の

様々な超常現象を解き明かしていきましょう!!」

さっきまでの部室でダラダラしたりゲームしたりっていうのはどこに行ったんだろうか。全くういはは落ち着きがないというか一貫性がないというか…恐らく明日になればまた活動内容も変わっているのだろう。

「というわけで私、入部届取ってきますね!」

嵐のように去っていった。

「はえぇ…あの1年生足超はえぇ」

「そういえばういはちゃんって地元のニュースになってなかったっけ?なんかのスポーツで全国に出たとかなんとか…」

「俺はちょっと分かんないかな。あんまそういうのは見なかったから。」

「私も知らないですね。でも、もしそうだとしたらなんで高校でその部活しないんですかね?」

「確かに…ちょっと複雑な事情があったりするんかもしれんね…」

「まあ、その辺は多分ういはがそのうち話してくれるんじゃないかな。俺は本人が言うまでは待とうと思う。本人である確信はまだないしね。」

「だねぇ…まゆくんがそういうなら私もそうする。」

どうやら精神的に引っ張り回されてる俺たちだが、これから先は肉体的にも振り回さ

れるようになる日も近いかもしれない。そろそろ持ってかれるのが体力だけじゃなくて骨も何本か持っていかれそうな気がしてきた。ういはは超常現象研究部にて最強。

◇◇◇◇◇◇

数分後、手に紙を何枚か持って帰ってきた。

「入部届、持ってきましたよー！」

「早いね。」

「ふふーん私運動全般得意なのでお任せ下さい！黛さんとアルスさん２人がかりでも勝っちゃいますからー」

「いや、何に勝つのさ。」

「んー…腕相撲とかですかね？黛さんの腕ポキって折っちゃいそうです！」

「ういはちゃん発想がいちいち物騒だよぉぅ…」

「実際腕折れそうだからやめてね。」

「残念です…」

「ういはちゃんサイコパスだぁ…」

「黛、この１年生大丈夫な人か心配になってきたんだけど。」

「リリさん。残念だけど俺の周りにまともな人は居ないよ。」
「ぐえぇ…」
リリさん。自分もそこに入ってること分かってないな。

◇◇◇◇◇◇
「あ、もうそろそろ夜になりよるね。」
「桜さん?」
唐突に桜さんが言い出した。そういえば桜さんもダジャレが好きだったな…しかし確かに、外の景色はすっかり夕暮れに変わっていて下校時間が近づいていることを知らせていた。
「そうですねー…じゃあ今日はそろそろ解散にしましょうか!明日の放課後に今渡した入部届に必要なとこ書いて持ってきてくださいね!」
「了解。場所は明日もここ?」
「そうですねー…そうしましょう!この空き教室に集合で!」
「はい、じゃあまた明日ですね。」
「あぃー、お疲れ様でしたぁー」
「おつりつきーん!」

「桜さんそれ可愛いですね！」
「可愛かろう？ドヤァ！ういはちゃん、それが分かるとはなかなかだねぇ！」
「おいー、お前らもうすぐ下校時間だぞー帰れ帰れー」
　唐突にドアが開くと担任の郡道先生が下校時間がすぎていることを告げた。
「あ、ぐんみちじゃん」
「おい夕陽。先生と呼べ先生と。」
「誰？」
「黛お前担任の顔忘れんなよ！なんなら入学前にも色々話しただろうが！…あ、もしかして先生のこと、もっと知りたくなっちゃった？先生と特別指導…」
　そう言いながら郡道先生が近寄ってきたので俺は小声でこう言った。
「先生北口で金髪糸目の男の人となにやら…」
「おーし！お前らさっさと帰れぇ!!」
　よし。
　ちなみに俺は詳しくは省くが郡道先生には入学前からお世話になっているため顔は忘れようがないんだけどね。
「じゃ、帰ろっか。」
「ですねー！」

「また明日ー」

◇◇◇◇◇◇

本当はもっと早く施設に帰って来れるはずだったのに時刻はもう7時を回ろうとしていた。一応連絡はしていたけどご飯とかの都合もあるしあんまり遅くなると良くないんだけどな。

「お、灰くんおかえり。遅かったね。学校には馴染めそう?」

「まあ、それなりにかな。」

やけに施設の人達がこちらを見てニヤニヤしている。

「何?俺の顔になにか付いてる?」

「いや、灰くんがそんなに楽しそうな顔して学校から帰ってくるのがなんだか嬉しくってね。」

「別に。そんなことないけど。」

「そっか。」

「うん。」

ういはに振り回されるのが楽しい?俺にMっ気はなかったはずなんだけど…それよりも忘れないうちに入部届を書いておかないと。

明日忘れたなんて言えばういはになんて言われるか分からない。あとリリさんも面倒くさそう。あの人は絶対煽ってくる。

「あ、それでさ、ちょっと部活に入ることになったから保護者の欄に名前とハンコ押してくれない？」

「っ…！そっか、了解。ハンコ取ってくるね。」

遠くから灰くんが部活入るって！と大きな声で報告するもんだからガッツリ聞こえてる。恥ずかしいからやめて欲しい。あと誰かわかんないけど赤飯はいらないから。

相羽ういはの憂鬱Ⅰ　③

朝学校に続く坂道を登っていると後ろから軽やかな足音共にいつもの騒がしいあいつがやってきた。
「黛さんおはようございます！」
「ん、おはよう。」
「黛さんテンション低くないですかぁー？」
「いや、ういはが朝からテンション高すぎるだけなんだって…」
「むー…そういうことにしておきましょう…それはさておき！ちゃんと入部届書いてきましたか？」
「聞かれると思った。ちゃんとやってきたよ。」
「はぇ…」
ういはの顔にありありと「黛さんが言い訳も何もなしにちゃんと持ってくるなんて…」と書いてある。そんなに驚くことだろうか。
「黛さん…何か言い訳でもして持ってこないと思ってました…」
ニアピン。

「いや、俺をなんだと思ってるのさ。」
「んー…クールですかした俺かっけー的な人かと…」
「え、そんな俺のイメージ悪かったの!?」
「わ、黛さんそんな大きな声出たんですね!?」
「いや、出るよ。ういは俺の事アンドロイドとか何かだと思ってる?」
「クールですか…」
「2回も言わなくていいから。」
「うー…ちょっとまだ信用ならないので入部届見せてもらっていいですか?」
「そんなに信用ないか俺の言葉…」
　結構ショックだ。ういはが俺の事をクールですかした俺かっけーとか思ってるイタい奴だと思ってたという事実にまあまあショックを受けた。俺周りからそんなふうに見えてるのか…もっとボケた方がいいのかな。
「ほら、これ。ちゃんと書いてるでしょ?」
「ほんとですね…あれ、保護者の欄…」
　ういはは保護者の欄に記載されてる名前の苗字が黛じゃないところを気にしている。
まあ、普通はそうなるよね。
「あー…まだ言ってなかったね。俺、児童養護施設的なところで暮らしてるんだ。」

「え、そうだったんですか…？じゃあ親御さんは…」
「俺が2歳の時に交通事故で亡くなったんだよね。まあ、小さいの頃のことだからあんまりはっきり覚えてないしそんな気にすることじゃないよ。今の施設での暮らしも気に入ってるから。」
「すみません、クールですかしたやつとか言っちゃって…」
「いや、別に両親がいないからこうなったわけじゃないし、寧ろそれのお陰でもっと積極的にボケて行こうと思えたから大丈夫だよ。」
「黛さんボケなんですか!?」
「そうだよ？俺ツッコミの相方探してM―〇優勝するのが夢だから。」
「へぇー…黛さんにもそんな夢があったんですね…」
「いや、ういはちゃん今のがボケだから…」
　後ろから俺たちに追いついたのだろう、アルスが話に入ってきた。
「あ、そうだったんですか！ごめんなさい黛さん！気づかなくって！」
「いいよ…俺やっぱりボケ向いてないかもしれない。あとアルスおはよう。」
「まゆくんおはよー、多分ういはちゃんにボケるのがダメなんだと思うよ…天然ボケには勝てないからねー。で、何の話してたらそうなるのさ…」
「えっと黛さんのご両親が2歳の頃に亡くなってるって話です！」

「えっ、そんな重い話がＭ―〇優勝とかそんな話に繋がってたの？ういはちゃんどんな思考回路してんの…というか、まゆくんのその話知らないしもう朝からパニックなんだけど？」

　アルスは最初からういはが変な話の持って行き方をしたと断定している。まあ、そうなるよね。

「俺両親が２歳の頃に交通事故で亡くなってそれからずっと施設で生活してるんだよね。」

「へぇー…まゆくんも若いのに苦労してるんだね…」

「いや、何歳だよ。」

「あははは！アルスさんおじさんみたいだぁー！」

「お、おじさんて…せめておばさんとかにしろよぉ…」

「おばさんでいいんだ…」

「よかねぇけどおじさんよりはマシだろぅがよぉ…」

◇◇◇◇◇◇

「ま、黛が超常現象研究部…ぶふっ…す、すまん…くくっ…」

終礼後に担任の郡道先生に入部届を出したら爆笑された。
こんな失礼な人間がよく教師になれたものだと思う。黙ってれば美人なのに中身が残念すぎる。いつか失言とかして担任外されそうなまである。
まあ、こんな先生でも入学の手続きの時に俺の事情を話した時には
「学校としてはもちろん私一個人としても黛君が円滑に学校生活を送れるようできる限りの事はサポートしていきます。」
みたいなことを言ってくれたし、実際仕事の合間を縫って施設に来て施設の人を混じえて色んな話をしてくれた。
例えば学校でできるサポート的なこととか、学校としてどのような対応をするべきか、みたいなことを色々話してくれた。
そんなことをしてくれるあたり悪い人じゃなさそうなんだけどな…あと、まさか担任になるとは思ってなかった。その辺りももしかしたら融通をきかせてくれたのかもしれない。
「先生、怒るよ。」
「ご、ごめん、余りにも意外過ぎて…パソコン部とかだと思ってたからまさか超常現象研究部とは…まあ、先生としては黛が自発的にそういう活動に参加しようとしてくれるのは嬉しいよ。」

　先生が施設に来た時俺が師匠にパソコンを教わってることとかは話してある。ちなみにもしういはに部活に誘われなかったとしてもパソコン部に入らなかったと思う。その時間があるなら自室のパソコンいじってる方が有益だと思うし。
「まあ、俺もういはに引っ張られてなかったら絶対に超常現象研究部はおろか部活すら入らなかったね。」
「あー…相羽か。そういえば黛、相羽とアルスの３人とで　仲良さそうに見えるけどなんか知り合いだったの？」
「いや、初日に目をつけられてそれ以降連れ回されてる。」
「そうか。まあ、黛にとってはあれくらい強引な方が良かったんじゃないの？」
「どうだろうね。」
「ま、その辺は私がとやかく言うところじゃないし…ほら、もう呼ばれてるわよ？」
　振り向くとういはとアルスが手招きしていた。
「じゃ、先生。」
「うん。行ってらっしゃい。」

◇◇◇◇◇◇

リリさんが言うには、超常現象研究部の顧問は来栖先生という先生だが軽音楽部との兼任であり、また超常現象研究部が顧問を必要とする機会が少ない部活であるため、ほとんど顔を出すことがないらしい。

そのおかげか、部室は私物持ち込み放題らしくういはは何を持ち込むべきか思案し始めた。

「ちなみに部活の備品って今んとこ何が置いてあるの？」

「えーっとねぇ…先輩が置いていった大量のボドゲと、あと部費をちょろまかして買ったゲームハードとモニターがありますよ。」

「リリさん、確認なんだけどここってなんの部活だっけ？」

「超常現象研究部ですよ？」

「活動内容は？」

「世界で起こっている様々な非現実的な事象を解き明かす、ですね。」

「実際の活動内容は？」

「ここに集まってゲームしたりお菓子食ったりしてました。」

「学校でそんなことしてる人らがおったんかぁー…」

「桜さんもこれからそうなるんだからね？」

「はぁー…そっか…私も悪に染まるんかぁー…」

　そんな大事ではない気もするけど。
「というわけで、今年度第1回超常現象研究部の活動内容を決める会議を始めます！」
「うわぁ！びっくりしたよぉ…」
　ういはが突然議題の周りをやたらとキラキラを散りばめたホワイトボードを叩きながら宣言した。何がどういうわけなのか分からないけど、そこにつっこんでたら話が進まないのでここは黙って続きを聞くことにした。
「議題はここに書いてあるように活動内容です！これから先私たちがどんな活動をしていくか話し合いましょう！」
「夕陽先輩、他の部員がいた時ってどんな活動してたんですか？」
「アルスちゃん、ごめんだけど何もしてなかったんだよね…さっきも言ったけどマジでゲームしてるか雑談してるかだったから…」
「じゃあ今皆さんがやりたいことを上げていって行きましょう！」
「帰宅。」
「黛さん帰ろうとしないでください！」
「真面目に答えるとするとマ〇クラかな…中学の時よく桜さんとやってたし。」
「あはは…やっぱり超常現象研究部の名前は無視するんやね…」
「マ〇クラ1票入りましたー！」

「え、でもさ、パソコンどうするの？」
「なんと備品として調査用、と称したノーパソが５台程ございましてこれにマイクラ入れたらみんなで遊べますよ。」
「スペックはどれくらいなんですかぁ？」
「私たちの活動に伴って購入したので割と新しいやつですねー。ゲーミングＰＣには及ばないですけどまあ、マ〇クラくらいなら何とかなるんじゃないですか？」
もうなんでもござれだな…
その後も超常現象研究部に関係ない様々な事が挙げられてはういはがやりましょう！と次々にホワイトボードに書いていく。
ふと、あることが気になった。
「リリさん、そういや文化祭の時はどうしてたの？」
そう、文化祭ではだいたい文化部は自信の行っている活動の発表があるものでは無いだろうか。
「あー…ガツくんが毎回適当にでっち上げてましたね…」
「伏見さんか…いや、なんかあの人なら適当にちょろまかしてそうだもんなー…パソコンももしかして？」
「そうですよ…なんだかよく分からないままにパソコンが備品として配備されてました

ね。あと文化祭の発表内容なんですけど、私もどこから引っ張ってきたのか分からないんですけどやけにリアルだしクオリティ高いし…ほんとほぼ1人で超常現象研究部背負ってましたね。」
「まあ、俺としたらあの笑い声が1番超常現象なんだけどね。」
「それはそう。あの笑い声深夜に聞こえてきたら寝れなくなるって…」
　酷い言われようだが実際そうなのだから仕方ない。
「夕陽先輩と黛さんっていつからお友達なんですか？」
「いつから…？多分小学校の時なんだろうけどいつの間にかリリさんは俺に対して突っかかってくるようになってたんだよね。」
「はぁぁ!?お前黛っ、ふざけんなよ!?」
「いや、ホントのことじゃん。」
「嘘はついちゃいけませんって習わなかったんですか！」
「俺教わる親がいなかったから。」
「ごめん。ごめんごめん。今のはごめん。ごめん、これはごめん。ごめん、ごm…もう、部長譲る。」
「それは困る。」
「え、部長譲ってくれるんですか？」

「ういは？話聞いてた？」
「いや、なんか部長譲りますよーって夕陽先輩」
粗方案が出終わった後はこんな感じで話してるうちに下校の時間が来た。今日の見回りは先日北口で郡道先生と一緒にいた人だ。神田先生というらしい。今度また郡道先生が絡んできた時の手札が増えた。

◇◇◇◇◇◇

予め遅くなると連絡を入れていたので今日も子供たちとは一緒に食べず、大人たちと一緒に食べることになった。
ちょうど着いた時に晩御飯の準備が整ったらしく、すぐに食堂に向かったのだが…
「ねえ、誰？赤飯炊いたの。」
何故かホカホカの赤飯がテーブルのど真ん中を陣取っている。
「あ、いや…ちょっと答えにくいんやけど…」
「え、あ、ごめん。」
俺の勘違いだった。この場にういはがいないことをこんなにも喜ばしく感じたことは無いかもしれない。ういはがいたらどんなに糾弾されることか。

「まあ、普通に灰くん部活動入部おめでとうの赤飯なんやけどね。」
「ねぇ。そういうのやめようよ。ややこしいし、めでたくもないし。」
「いや、めでたいんはめでたいやろ？まさか高校で部活動をするとは思ってへんかったから！」
　何やらお酒まで準備している。酔っ払うとやたらと絡んでくるからちょっとめんどくさいんだよね。一応、百歩譲ってこの祝いの席を受けるとすると主賓は俺なんだから俺に優しいものにして欲しい。
「食後用にドーナッツ買ってきてるから楽しみにしててねー？」
「そうそう、灰くんの好きなやつも買ってきてるから！」
　まあ、仕方ないか。

相羽ういはの憂鬱Ⅱ　①

入学して1ヶ月近くが経過し、相変わらず学校に着くまでの山登りで教室に辿り着く頃にはもう死にかけになっているのが日常になってきた。今日も早朝ハイキングコースを全身で満喫していたところにトドメをさすが如く、台風並のパワーを持ったあいつがやってきた。いや、進路の予測ができない分台風よりもタチが悪いかもしれない。

「黛さんおはようございます！」

「おはよう。」

「黛さん元気ないですよ？ほら、もっと大きな声で！」

「痛い痛い。痛いから。折れるから。」

ういはがべしべしと背中を叩いてくるんだけど力の加減ってものがないのか…めちゃくちゃ痛い。多分背中赤くなってる。あとアルスはニコニコしてないで助けて欲しいんだけど。

◇◇◇◇◇◇

授業中しっかり体力を回復した俺は即座に回復した体力を削られる場所へと足を運んだ。以前体調不良（仮）で部活をさぼ…休んだことがあったんだけど次の日のういはは大型犬のように絡んできた。

通学路で捕捉されるや否やこちらを押し倒さん勢いで追求され、最初はかわしていたのだが、だんだん適当な嘘を考えるのがめんどくさくなりサボった旨を伝えると…いや、やめておこう。思い出しただけでもどっと疲れる。

そんなこともあってか俺は望まない形でそれ以降は皆勤賞になっていて、今日も例に違わず進まぬ足取りで部室へと足を運んでいたのだが…

「黛さん！」

「なに？」

「Ｗｅｂサイト作りましょう！」

「え、なんの？」

「私たちの部活のですよ！超常現象研究部として色々世界の謎を解き明かすのに情報を募る私たちのサイトがないなんて許し難いですよ！」

一体誰が許さないんだろう。とまあ、こんな感じで超常現象研究部のサイトを作る事になったんだけど正直それくらいなら寝起きでもできる。ういはの要望を聞きつつ適当に作っていく。

「まあ、こんな感じだね。どう？ うい…」
「ダウト！」
あれ、ういは？ なにしてんの？ なんで女子４人でダウトしてんの？ いや、いいんだけどさ…女子には女子の世界…か。
速攻で暇を持て余した俺は触っていたパソコンで適当に遊んでいた。学校のセキュリティを外したり、タイピング練習をしたり、その後はもう適当にネットサーフィンしてた。あ、あのゲーム続編出るんだ。
「まゆゆ終わったよー？」
「黛さーんやりますよー？」
桜さんとういはがこちらに手招きしてきた。どうやら俺はハブられてなかったらしい。よかった。
「じゃあ黛入ってきたし罰ゲームありにしますか？」
「そだね…罰ゲームの内容はどぉするの？」
「１位の人の命令を聞く、ってどうでしょうか！」
「いいんじゃない？」
「じゃあやりましょうか！」

◇◇◇◇◇◇

　その後の流れは大富豪の各々の地域でルールが違ってくるから、お互いのルールを説明して1番メジャーである（とおもわれる）ルールを適応した。第1戦はういはが大富豪、俺が富豪、その後は桜さん、リリさん、アルス。第2戦ではまたもやういはが大富豪、富豪になったのは桜さん。俺は平民でリリさんが貧民、大貧民はまたもアルスだった。そして第3戦もまたもや…

「上がりですっ！」

「つえぇ…ういはろつえぇ…」

「ういはちゃんまぁじでつよいね…」

「あはは…いやぁ、なんか仕組んでるんちゃうか！って思ったくらいやわ…」

「私、神に愛されてますね！」

「あながち否定できないんですよねぇ…あがりっと。」

「リリ先輩も上がっちゃったよぉう…えぇ…」

「黛さんが負けるとこ見たいので皆さん頑張って下さいよ！」

「ういは？なんか俺悪いことしたっけ？気に触ることしてたら謝るからさ、なんで？」

「特に理由は無いですけど黛さんが悔しがるとこ見たいので！」

「こんな理由で負けるのやだなぁ…はい、おつりつきーん！」
「げ、桜さんまで…まあ、アルスには勝てるでしょ。」
「んふー、舐めてもらっちゃぁ困るぜぇ？オラァ！」
やけに口の悪いアルスは口調とは裏腹に4を2枚という微妙な数字を出してきた
「えぇ…アルスさすがにバカにしてない？」
俺はKを2枚出してあと1枚。9だけどこれで上がれるでしょ。アルス大貧民だったし1を2枚持ってるわけ…
「まゆくん甘いよオラァ！」
「えっ？嘘、大貧民なのに1を2枚持ってたの？」
「いやさぁ、最初の手札ジョーカーと2もあってめちゃくちゃ強かったんだよぅ…ういはちゃんに取られちゃったけど…」
「それはルールだからね。仕方ない。」
一瞬焦ったけどアルスの手札は残り5枚。さすがに負けるわけ…
「革命だよぉぅ!!」
負けた。

◇◇◇◇◇◇

結局最後の最後でアルスの大逆転勝利の前に屈した俺はういはの命令に従うことになった。くっそ、あのツルツルまんじゅう…

「じゃあ黛さん、私と一緒にリングフィッ〇アドベンチャーやりましょう！これが命令です！」

「嫌だ。」

「なんでですかぁ！」

「いや、ういはのフィジカルに俺ついていける自信ないもん。」

「えぇ…でも命令なのでリングフィッ〇アドベンチャーはやってもらいますよ！」

「じゃあ疲れるまでね。」

「それだったら黛さんすぐ辞めるじゃないですか！」

「ごめん、黛が運動してるとこ私ほとんど見た事ないわ。」

「いや、リリさんだってそんな動ける方じゃないでしょ。」

「はっ、黛？さてはタ陽リリが運動出来ることをご存知でない？」

「ご存知でないね。なんか言ってみてよ」

「シャトルラン８０回。」

「え、リリちゃん凄いやん！」

桜さんが食いついてくれたので逃げるしかないね。俺？見学してるか保健室に逃げてた。
「ういは、R○A以外で何かない？」
「そうですねぇ…じゃあ今度みんなでお出かけしましょう！で、黛さん、その時にちゃんと来てくださいね？これで許してあげます！」
「えぇ…外あんまり出たくないんだけど…」
「一日耐久とどっちがいいですか？」
「あー、お出かけ楽しみだなー。」
「うむ、よろしい。」

◇◇◇◇◇

今日は予定がある人が多く、いつもより早めに解散した後、俺はリリさんに呼び止められた。
「黛さん。大切なお話があるのでちょっといいですか？」
「何？」
「愛の告白とかじゃないのでそんな気がまえなくていいんですけど、ちょっとあまり人

に聞かれたくない話なので場所を変えましょう。」
　そういうとリリさんは俺を近くの神社に連れ出した。しばらくどう話し出すべきか悩んでいる様だったが、数分後決心が着いたのか話し出した。
「単刀直入に申し訳ないんですけど、私はこの時代の人間じゃありません。」
　…ちょっとよく分からない。
「信じて貰えないと思います。現在私があなたに示すことのできる証拠は一切ないですし、何か情報を伝えたりする事は出来ないので。ただ、事実として知っていて欲しいんです。そして目的があって今未来人がここにいるということも。」
「まあ、信じるか信じないかは一旦保留しておくけどさ、目的？っていうのはなんなの？」
「それは…相羽ういはの監視です。」
「え？ういは？」
「そうです。彼女は神に近しい存在であり、２０１９年の８月１１日、初めてその力を使ったのです。」
　いきなり自分が未来人宣言した後にういはが神？ういはの提案かなにかでどうにか同調したところで、いやそんなわけないでしょ！って笑いものにするつもりだろうか。あまりにも荒唐無稽にも程がある。

「なに?ドッキリなの?そういうのなら早くネタばらしして欲しいんだけど。」
「ドッキリじゃないです。これは…ちょっと信じて貰えないと思いますが、それでも話だけは聞いて欲しいんです。」
「そこまで言うなら聞くだけ聞くよ。」
「すみません、ありがとうございます。で、相羽ういはが神という話ですが、おそらく彼女はまだ無意識の領域にあるのです。その域に干渉できるのは夢を見ている時だけ。なのでまだ今は大きな問題はありません。」
「どういうこと?じゃあ今はそれっぽい夢を見てるだけってこと?」
「まあ、今のところそうなんですが、２０１９の８月１１日、彼女は夢で見たペガサスの羽根をむしり取り、それを実際に現実世界に持ち込んだんです。」
　ペガサスの羽根をむしり取る女子高生…その時は中学生か。そんなのがいるわけないでしょ…。ういはがいつも俺の事折れそうとか腕もげちゃいそうって言ってるのはふざけ半分で半分はガチなのか。
「じゃあ、あのういはがいつも胸に刺してる羽根って…」
「そうです。いつまで経っても汚れないのは定期的に変えてるとか漂白しまくってる訳じゃなく、この世界のものの干渉を受けないからです。違う世界のものと等しいですからね。」

「その理由は分かった。でも、なんでリリさんはここに来てういはの監視をしてるのさ。」
「それは、ういはがこれ以上世界を大きく替えてしまうことを防ぐ為です。」
「ういはが？世界を？」
「はい。彼女は２０１９年、初夏に事故によって母を失い、相羽ういは自身も下半身が不随となる怪我を負いました。そして…」
「ちょっと待って、ういはが下半身不随？あんなに元気に動いてるじゃん。」
「はい、それもこの話と関わってくるのですが、たしかに彼女は事故によって下半身不随にたりました。そしてそれ以降父が最愛の妻を失った悲しみにより精神を病み、それ以降徐々に彼女に暴力を働くようになりました。反抗しようと思えばできたのかもしれませんが、いくら暴力を振るってこようとも父親は父親。それにいくら彼女がスポーツウーマンだとしても男女の力の差はありますからね。」
　後々考えてみれば、リリさんが普通知りようがない情報をここまで知っているというのは未来人というのもうなずける。だがその時はそんな冷静に考えられなかった。話の内容がショッキングすぎた。
「そして、そんな日々が続いていた中、８月１１日、彼女は全てをなかったことにしたのです。事故のことも、家族のことも。彼女はにはそれ以前の記憶がありません。あの夢

から目が覚めた時から彼女にはアイドルを夢見る、男勝りのフィジカルを持った家族のいないひとりぼっちの少女なんです。そしてそれが世界の当たり前になっていて、この時代のういはを知る人々はそれが自然なことなんです。」

「つまり、ういはは無意識に家族を失う悲しみをもう二度と味わわないように家族の記憶と存在を消して、父親からの暴力を苦にしないようにそれに耐えられるフィジカルを手に入れたってことか。」

「そうなりますね。」

しかしこの話には少し矛盾があった。

「でも、ういはがそういう風に世界を書き換えたのならどうしてリリさんはそれを知ってるのさ?」

「それは…私が書き換えられる前の世界の人間だからです。」

「じゃあリリさんの世界は…」

「もうすぐ滅ぶ、という訳ではなありませんがこれ以上大きな変化が起こると耐えられないかもしれません。本来、多少未来の人間がが干渉する程度であれば世界の修正力が働いて何も起こりません。しかし、いるはずだった人間の存在が2人もなかったことにされ、それらの記憶や記録が失われるとなると、その先の未来に大きな影響がでてしまうんです。」

「にわかには信じ難いけどね。まあそうなんだろうね。」
「まあ、簡単に例えるとピサの斜塔みたいな感じです。未来の人が干渉するというのは建設中の工事現場に素人が勝手に出入りするようなものでして、完成に問題はそう出ません。」
「しかし今回は基礎が崩れたり、地盤が緩んだようなものです。今はなんら問題がないように見えますが高く積むにつれて徐々に傾きが大きくなって最終的には本来あるべき場所から大きくズレた場所に建物が建ってしまうんです。」
「でもそれじゃそのズレがリリさんの先の未来の崩壊に繋がるんじゃないの？」
「はい。なので最初は私も事故の前に行こうと思ったのですが、それより前に干渉することが一切できなくなってたんです。」
「それは…なんで？」
「分かりません。ですが、相羽ういはが干渉を拒んでる可能性があります。なのでそれを探るべくういはの監視を始めた、という形ですね。」
「じゃあ小学校の時の記憶は？あのころのリリさんは誰だったの？」
「高校での調査を円滑にするためにそういう風に記憶を植え付けさせてもらいました。それに関しては本当に申し訳ないです。」
「そっか……じゃあ、記憶オンリーでリリさんあんなにムカつくやつだったんだね。」

「いや、うん。それは…落ち着いたクールなやつだと思ってたんですよ…だからこっちからグイグイ行こうと思ってて…まさかこうなるとは…」

その後はいつも通り軽口の叩き合いをしながら帰った。事実を知った時最初俺はびっくりした。けど、過去は過去だし、それを無かったことにしても今こうやって話しているのは他ならぬ夕陽リリという人間だから。未来人だろうがなんだろうがリリさんがりりさんであることに変わりはないしね。

相羽ういはの憂鬱Ⅱ　②

リリさんから衝撃の事実を告げられた次の日も当たり前のように学校はあるし当然、部活もある。世界は俺中心で回ってない。そんなこと幼い頃から分かりきっていたし今更どうという話でもない。だが、それを受け入れられなかった少女がいた。それが相羽ういは。

彼女は母の死後豹変した父親の存在を受け入れることが出来なかったのだ。母の死は受け入れ難かったものの、中学生には死は余りにも覆されるものでは無いと思い知っていた。だが、それ以降の父親の在り方は余りにも彼女には受け入れ難く、自らの世界をそのような事故がなく、被害者であった両親の存在をなかったことにしたのだ。

彼女は死を拒絶するには余りにも大人で、世界の残酷さを受け入れるには余りにも幼かったのだろう。

しかしその結果未来は在るべきはずの所から大きく逸れ、在るべきはずではなかった未来へと進もうとしている。これ以上大きなズレを起こさないためにも未来から相羽ういはの監視を目的としてやってきた少女が夕陽リリだった。1度ズレてしまったものは相羽ういはが強くそう願わない限りもう戻らないが、これ以上ズレを大きくしない

ためにも彼女の存在が必要だそうだ。正直俺はこういった類を信じてはいなかったのだが、本人がそういうのであればそうなのだろう。
しかし俺がどうしようかと考えてみたところで結局は今日も重い足取りで一室へと向かう間の単なる暇つぶしにしかならないのだった。

◇◇◇◇◇◇

その部室で今日も時間を部活を、もとい、暇を潰していたところ今日もいきなり、突然、唐突に、いつだってそうなのだが相羽ういはは大きな声を出した。
「この超常現象研究部には問題があります！」
美術部の間違いじゃないのかな。
「ういはちゃんどうしたのさ？いきなり大声出してさ…まあ、いつもいきなりだけど。」
「アルスさん！その問題とはなんでしょう！」
「ええ…喋んなきゃ良かった…」
「３・２・１…はい、時間切れ！次！凛月さん！」
「僕もう解答権なくなったんだぁ…」
今日も元気にういははういはしている。その後全員に聞いて周り、桜さんもいきなり

回ってきた選択肢に驚いてあたふたしている間に時間切れとなり答えれず、リリさんは苦し紛れに備品の品揃え、俺は予算が少ないこと、と答えた。というかリリさんこんなに備品あってなにか不満でもあるのだろうか。

「ダメですねぇー。皆さん全然ダメです！」

その言葉を受けてリリさんがいたずらっぽく言った。

「ほう…私が先輩から受け継いだ部活に問題があるとういはろは言いたいんですね？」

「まあ…その言い方はちょっとアレですけど…とにかく、この部活は知名度が低すぎます！これは問題ですよ！」

「ぐふぅ…確かにそれは私も何となくわかってましたけども…ちょっとした冗談をこうとズバッと部長を務めている部活の短所を言われると…あはは…」

ういはの悪気がないながらざっくりと相手を抉るようなもの言いが特に理由もなくリリさんを襲った。

「でもさ、知名度がないって言われてもどうするのさ。ビラでも配るつもり？」

「黛さん、正解です！ビラを配るんです！」

「ビラを配るって言っても誰が用意するのさ。先生の許可も取らなきゃ行けないし大変でしょ？」

「私が全て準備済みでございます！」

珍しくういはが計画的な行動をしていた。
「でもさ、ビラ配りってそれ誰がやるの？」
「私は言い出しっぺなのでやりますけど…実は決めてましてですねぇ…」
「俺はやらないからね。」
「まあ、黛さんはそういうと思ってたので…アルスさん！」
「えぇ…ボクゥ…やだよぅ…」
「もう衣装も買ってきてるから無駄ですよー」
「えぇ!?ほんとういはちゃんこういう時早いよね…」
「凛月さんとリリさんの分も一緒に買おうと思ったんですけど…お金が足りなくなりまして…ごめんなさい…」
「いやいや！ええよー！私の分なんて全然要らんから！…ツスゥーいや、まじで危なかった…ういはちゃん怖いわ…」
「はい！私の分も要りませんから！…っぶねー…ういはろまじこえーよ…」
どうにか桜さんとリリさんはは命拾いしたらしいがアルスが今日の生贄になった。
ドンマイ、アルス。遺骨は拾ってやる。
「はいはい、というわけでお着替えしますよー！アルスさん逃げないでくださーい？ほらー痛くしませんからー？」

「やだよ着たくないよぉ！なんでボクなのさ！先輩達の方が絶対可愛いし似合うじゃんか！おかしいよぉ…」
「はい、まゆゆは出ましょうねー」
「黛、貴方変態ですか？」
「ごめんごめん、それはそれとしてリリさん、なにか恨みでもある？」
「いえ？あ、いや、恨みなら沢山ありますね。」
「それ逆恨みって言わない？」
「んだと？おぉ？やるんか？」
「はいはい！まゆゆもリリちゃんも仲良いのはわかったからとりあえずまゆゆ、部屋出よか…捕まるよ？」
「ごめんなさい。」

◇◇◇◇◇◇

「アルスさん可愛い!!」
「暑い…あと力強い…痛い…」
着替え終わったらしくリリさんから手招きされ部室に入ってみると、長身のういはが

まんまる4等身のアルスに抱きつきながらすりすりしていた。ういはは青をイメージカラーとしたようなフリルが沢山ついたいかにもアイドルというような衣装を、アルスは白を基調としたワンピースに金を差し色にした黒いローブを羽織っていてまるで魔法使いのような装いだ。…これ結構高そうだけど？

「ういはって時々大型犬みたいだよね。」

「ですねぇ…なまじっかパワーもある分余計に…」

リリさんとコソコソ話していると満足したのかアルスを離したういはがこの衣装のコンセプトを説明し始めた。

「2人とも目が青いので青をイメージした衣装にしました！いやー…私天才ですね…あ、黛さんもリリ先輩も目青いですね…なんなら黛さんのメッシュも青だし…」

「いや、これメッシュじゃなくてインナーカラーだから。」

「黛、そこ謎のこだわりあるよね…まあ、私目は青いけど髪の毛ピンクだしなー…あんまり3人と比べて青感はないんじゃないですか？」

「むー…じゃあリリ先輩は残念ですがごめんなさいして黛さんも含めて3人でぶるーずっていうユニット組むのはどうでしょう！」

「ボクはもう確定なんだね…」

「やだよ。そもそも3人で何するのさ？」

「U―Ｔｕｂｅｒとかどうですか？この部活を知ってもらうためや、色んな謎を解き明かす！みたいな！」
「嫌だ。」
「やりたくないよぉ…」
　ちなみに補足になるがこの学校にはU―ｔｕ部という部活があり、学校の宣伝を兼ねて広報的な活動を行っている部活がある。最近は学校の広報的なものだけでなくゲーム実況や雑談放送なども行っているらしいけど。その部活だが、部長の月ノ美兎を初めとした通称ＪＫ組と呼ばれる、というか実際ＪＫだしそうなんだけど、月ノ美兎、静凛、樋口楓という３人を中心としたメンバー達が各々のチャンネルを持ち、北高所属U―Ｔｕｂｅｒとして活動しており、メンバー全員のチャンネル登録者数がそれぞれ１万人を優に超えており実質個人活動の学生U―ｔｕｂｅｒとしてはかなりの人気を誇っている。月ノ美兎に至っては１０万人を超える人気っぷりだそうだ。そんなこともあり、U―ｔｕｂｅｒ志望の学生がごく稀だが去年から入学し始めてもいるらしい。
「とりあえずこのパソコンからログインできるチャンネルを作っておきましたー！」
「はええ…このアイドル仕事はええ…」
「なぁ、ビラ配りはどうなったん？」
「ちょ、桜さん！ういはがせっかく忘れてたのになんで言っちゃうんですかぁ！」

「あはは！私としたことが忘れてましたねぇ…桜さんありがとうございます！じゃあアルスさん！行くよ！」
「やだよぉ…行きたくないよぉ……まゆくん助けてぇぇ…」
「頑張れ。」
ういはに引きずられて為す術なく連れていかれていくアルス。残念だが俺もだけどういはにパワーで勝てる人材はそうそういない。
哀れアルス、お前のことは忘れない。

◇◇◇◇◇◇

２人が出ていったあと3人でマイクラをしながらダラダラしていると、ようやく2人が帰ってきた。２人の様子は対照的であり、ういははウキウキで随分楽しめたようだが、アルスはもう疲労困憊を絵に書いたような有様で、ほっておけばそのまま今すぐにでも死にそうな勢いだった。
「死ぬー…」
見ればわかる。
「いやー…全然受け取って貰えませんでしたね…でもとりあえず配りきったのでＯＫで

す！」
「ういは楽しそうだね。」
「そりゃ楽しいですよ！こんな可愛い服着てなにかするの楽しいに決まってるじゃないですかぁ？」
「ごめん、俺あんま外出ないから服とかあんまり持ってないしわかんない。」
「あー…まゆくんがよくマイクラのスキン変えて遊んでるみたいなことやと思うよ？」
「なるほどね。何となくわかったかもしれない。ありがとう桜さん。」
「黛さんってお礼言うんだ…」
「ういははほんとに俺の事なんだと思ってるのさ。」
　挨拶もするしお礼とかもちゃんと言ってると思うんだけど。
「あ、ちょっといいこと思いついたのでちょっと私いってきまーす！」
「嫌な予感しかしないよぉ…」
「ははは…私もそう思いますね…」
「ういはちゃんさっき帰ってきたばっかでもういなくなっちゃった…」
「ほんと天災みたいなところあるよねぇ…」
　ういはのいいことが俺たちにとって心穏やかだった試しは1度もない。今回はどんな厄介事を俺たちに持ってくるんだろうか。俺たちにできることはせいぜい少しでも

ういはの持ってくるものが肉体的にも精神的にも疲労の少ないものであることをいのるだけだ。

相羽ういはの憂鬱Ⅱ　③

「というわけで皆さんにはＵ―ｔｕｂｅｒになってもらいます！」
　先程いいことを考えたとか何とか言って走り去っていってから十数分後、開口一番にういはは俺たちにそう告げた。何がどういう訳でというわけになるんだろう。
「ど、どゆこと？」
「ごめん、ういはろちゃんと説明してもらっていい？」
「あはは…」
　ついに桜さんの反応か苦笑いだけになっちゃったじゃないか。この人でなし！
「ほら、私たちの部活は知名度が低いじゃないですか？そこで私たちがＵ―ｔｕｂｅｒとして活動することでこの部活の知名度はうなぎ登り！するとどんどん私たちに解決してもらいたい様々な謎が舞い込んでくる！これは絶対面白いじゃないですかぁ！ねぇ、黛さん！」
　長文を早口でまくし立てるように言い切ったあと目を輝かせながらういはノールックキラーパスがこちらに飛んできた。何故そこで俺に振るんだろうか。
「俺に聞かれても分からないんだけど。」

「むー…まあ、黛さんには分かってもらおうがそうでなかろうがどの道一緒にやってもらうので同意はいらないんですけどね。」

チャンネル作ったとかなんとか言ってたけどやっぱりか。

「はいはい。俺に拒否権ないんだね。」

「ぷぷぷ！まゆくんお疲れ様さまぁ！」

「アルスさんもですよ？当たり前じゃないですかぁ。」

「ぷぷぷ。アルスお疲れ様さまぁ。」

速攻でフラグを建てて回収したアルスがぬぅぅとよく分からない言葉で唸っている。ういはが行動する時に俺がいるならアルスも一緒に巻き込まれるのそろそろ分かってもおかしくないんじゃないかな。ほんとに。

「いやぁ、お疲れ様ですねぇ！黛さんが投稿する動画、リスナーとして楽しみですねぇ？」

ここぞとばかりに煽ってくる未来人。バラしてやろうか。

「あ、先輩方ももちろん一緒ですからね！」

「夕陽先輩が投稿する動画、リスナーとして楽しみにしてますよ？」

「えぇぇ!?私も!?」

ここにも一級フラグ建築士がいた。建築士はこれまたんなぁぁぁとどこかの大穴か

ら聞こえてきそうな唸り声をあげていて、その隣で完全に巻き込まれた形の桜さんが勢いよく立ち上がっている。

他２名と違って大人しく笑いながら眺めていただけなのに。ういはの攻撃は全体攻撃か単体への必殺しかないのかもしれない。完全にぶっ壊れじゃん。そもそもういはのいる部活に参加してしまった時点でこうなることはわかってたけどさ。

◇◇◇◇◇

こうして全員無事（？）Ｕ―ｔｕｂｅｒデビューが決まった部員全員による企画についての会議が始まった。もちろん議長はういはである。

いきなり案を出せと言われてもそう簡単には出てくるものじゃないと嘆いたアルスの一言により、とりあえずＵ―Ｔｕｂｅｒデビューは保留になった。そして後日改めてＵ―ｔｕ部の先輩方に基礎から教えて貰うことにした。そもそも先程走って出ていったのはＵ―ｔｕ部の先輩方に挨拶に行っていたらしく、先輩方の時間がある時に改めてアポをとってみんなで話を聞きに行くことになった。

「じゃあ今後の方針も何となく決まったところで今日は解散しましょうかね…」

「せやねーいい時間になってきたし？」

「お疲れ様。特にアルス。」
「ほんとだよぉぅ…」
こうして帰り支度をしていると桜さんからスマホでメッセージが送られてきた。内容は、少し話したいことがある。学校を出たあとここに来て欲しい。という文章と位置情報であった。
今日も帰るのが遅くなりそうだ。

◇◇◇◇◇◇

…どれくらい時間が経っただろうか。桜さんはずっとッスーと息を吸っては目を泳がせるばかりで話に入らないまま膠着状態が続いている。
先程送られた位置情報の場所に向かうとそこは大企業の役員クラスが住むような超高級マンションだった。ロビーで桜さんが待っていたので、連れられるがままマンションのとある一室に入った。以前一人暮らしをしているとの事だったが、こんなマンションだとは思うまい。
と、色々これまでのあまりにも多すぎる情報量に頭痛を覚えながらも暇つぶしのためにこれまでのことを噛み砕いていると桜さんがようやく口を開いた。

「あー…のさ、」
「うん。」
　「実は…私さ、普通の人間やないんよね…。」
「そうなんだね。」
「あはは…やっぱ信じて…え？受け入れてくれんの!?私まあまあ突飛なこと言ったと思うんやけど!?」
「いや、この前リリさんに私未来人とかなんとか言われたから。この流れだと桜さんもその感じかなーって。」
「あはは…リリちゃんが先に言ってたんか。なら良かったわ…。でもなんで信じてくれたん？」
「いや、リリさんにういはのことについて大前提となることが正しいとするならばその時に信じるに値する情報を話してくれたから、かな？」
「じゃあういはちゃんのことはもう知ってるんやね…。」
「そうだね。まあ、リリさん普段あんなのだけど真面目な時はちゃんと話すからその話はなくても信じてたと思うけど。で、桜さんはなんなの？」
「私は桜第一惑星から来た、いわゆる皆からしたら宇宙人って呼ばれる存在なんよ。で、地球に来た目的はサンプリングのため。元々は別のところに行く予定やったんやけど

ういはちゃんのことがあってね。彼女の持つ能力は使い方さえコントロール出来ればまさに無限の可能性がある。まさに全知全能の神様のような力やからね。唯一無二の存在やからサンプリングは難しいけど彼女を観察することで少しでも情報を得ることが出来たらなにかヒントになることや参考にできることがあれば、と思って地球に来たんよね。」

「桜さんはそのー…リリさんみたいに未来に影響とか出てないの？」

「うちのところは地球から観測することも難しいような離れた場所にあるからほとんどお互いの現象が干渉することはありえへんからね。ただ、ういはちゃんの事態は話が別。多分星から出てなかったら観測できるかどうか、ってところやったけどたまたま既に私は出発してたからね。それで地球に少し近づいてたから驚異的な情報爆発がしっかり観測出来た。それでうちに連絡してここに来た、って感じやから影響は少ないんやないかな？」

「なるほどね。ちなみに桜さんは俺たちと接触する時に記憶の改ざんとかはしてないの？リリさんにやられたらしいんだけど。」

「あー…リリちゃんはそうしちゃったか…私は普通に途中から転校してきたでしょ？事実はほとんどまゆゆの記憶通りだよ。それに私たちの技術だと記憶をわざわざいじらなくてもいいんだけどねー。」

「そんな技術があるのにそれでもういはの事は別格なんだね。」
「そうよー!ういはちゃんの能力があればこの世界丸ごと書き換えることやってできるっちゃけん、もしそれを悪いことに使おうと思っとる人らに取られたら…この宇宙どころか世界の存在そのものが無くなるかもしれんのよ。そういう連中からういはちゃんの身を守るためにも、っていう理由もちょっとはあるんよね。」
「そっか…。」
　ういはに関する事態は俺が思っていたよりももっと複雑で壮大で俺みたいなちょっとパソコンができる程度のやつにはどうにもならない規模の出来事が今、この広い宇宙の中の、このちっぽけな地球でわざわざ起こっているらしい。普通に生きて普通に暮らしている俺には想像もつかないが、もしかしたらこの世界はういはを中心に回っていると言っても過言ではないのかもしれない。
　こうして桜さんの話を聞いてようやく落ち着いた所に、突如俺のスマホから着信音が聞こえてきた。電話のかけ主はアルスアルマルと書かれている。
「ごめん、ちょっとアルスから電話が。出ても大丈夫?」
「ええよー。私黙っとくね?」
「ありがと。…もしもし?アルス?」
「あ、まゆくん?あー…えっと…いや、あの…」

この流れで行くとおそらくアルスも私普通の人間じゃないって話をしようとしてるんだろう。そんな話電話で済ませるかな、普通。
「いや、そんなどもる話を電話で済まそうとするなよ。この後駅前集合でいいね？」
「うぐっ…ハイスミマセン…」
アルスの返事を聞いて俺は通話を終了した。
「もしかしてアルスちゃん電話で自分のこと言おうとしてたの？」
「多分そうだね。流石にそれはさ、直接言う話じゃない？」
「やねー…じゃあそろそろまゆゆ家出る？」
「そうだね、ありがと。」
「ううん！こちらこそ急に呼び出してごめんね？」
「全然。また明日学校で。」
「うん！じゃあね！」

◇◇◇◇◇◇

駅前に着くと既にベンチで小さくなっているアルスがいた。
「どーも。」

「あっ、もう来たんだ。」
「近くにいたからね。」
「そうなんだぁ…あはは…」
「で、アルスは何人なの？人じゃない？」
「うぇっ!?な、なんのこと!?な、なにさ、いきなり!?」
「いや、もうリリさんも桜さんも両方話聞いたからさ。」
「あぁ…もうばれてんだぁ…確かに今思えば電話した時ボクが何話すか分かってたっぽい感じしてたもんねぇ…」
「まあ、そうだね。で、実際アルスは何者なの？」
「ツスー…ボクは異世界出身の魔法使い。相羽ういはの起こした世界改変の影響でこっちに転移しちゃって、元に戻る術を探るべくういはちゃんを調査してるって感じだね。」
「へぇー。」
「ちょっ、反応薄くないか!?ねぇ！」
「いや、未来人、宇宙人と来たらもう異世界人位しかないじゃん。何となく予想できるでしょ。」
「他にもあるだろぅ！地底人とか平行世界の住人とかさぁ！」
「まあ、確かにそうだけど地底人あんまり影響受けて無さそうだし、平行世界の住人は

ちょっと考慮してなかったかな。」
「ぬぅー…まゆゆの驚く顔見たかったのにさぁー…」
「生憎アルスには１００年早いよ。」
「ぬぁんだとぉ!?」
「じゃ、アルスの正体もわかったところだし俺、帰るね。」
「え、もう帰るの？ボクに異世界人の証明しろとか言わないの？」
「いや、もう２人くらいそういう人いたからもういいかなって。疑うのもめんどくさいし。」
「えぇ…」
「そういうことだから。じゃあね。」
「あ、そういえばさ、ボクの他にもう１人転移してきた人がいるんだけどさ、エクスアルビオっていう人なんだけどまゆくん知ってる？」
「あぁー…この前アルスを呼びに来てた金髪の先輩のこと？」
「そうそう。ボクはエビ先輩って呼んでるんだけど、エビ先輩もういはちゃんの身の回りの調査しなきゃ帰れないのわかってると思うんだけどあの人全然手伝ってくれなくってさぁ…。」
「そうなんだ。帰る気ないの？」

「ボクもそう思って先輩に聞いてみたんだけどさぁ、なんて言ったと思う？」
「さぁ？」
「「え、帰りたいに決まってるじゃないですか。だから師匠が頑張ってるのを邪魔しないようにしてるんですよ？」って言ってそのまま遊びに行きやがったんだよ！んぬぅー！許せないよなぁ！」
その後もアルスは如何にエクスの行いが酷いか、その迷惑をどれほど被ったかを語り続けていたが、傍から見る分には普通に仲のいい2人にしか感じない。
まあ、そう言いながらエクスも裏で帰るためのこととか色々やってるんじゃないかな。いや、でも話を聞く限りではやってないような気もするけど。
ただ、一つ気になったことがある。
「アルスさ、それだけういはの周りに普通の人間では無い人が集まってるけど俺はどうなの？」
「あー…大丈夫。まゆくんは普通の人間だよ。超能力も超人的な力も持ってないただの高校生だから。」
「…そっか。」
「なんでちょっと残念そうなのさぁ…」
だって男の子なら憧れるでしょ。そういう力的なの。

相羽ういはの憂鬱Ⅲ　①

本格的に梅雨入りし、雨の降る中毎朝懲りることなく登山を続けている俺には何か褒美的なサムシングがそろそろ舞い降りてもいいのではないだろうかと思うが、舞い降りたのは周囲の友人からの未来人、宇宙人、魔法使いＣＯだった。どう考えても苦労に対して新たな悩みの種を投げつけられただけである。更に最近、じわじわとにじり寄る夏の暑さに怯えながら、夏本番になったら俺は学校に辿り着けるのか不安になってくる。この暑さはいい加減異常と認めてリモートで授業を受けられないものだろうか。無理だろうね。学校にそんな設備ないし。

こうやって相変わらず無駄な思考をフル回転させることで梅雨の時期の登校、及び登山から目を背け続けている毎日だったが、今日もういはから新たな悩みの種をマッハ３で投げつけられた。

◇◇◇◇◇◇

「なんかめちゃくちゃニコニコしてるけどういはいいことでもあった？」

「鋭いですねー黛さぁーん！実は私、昨日月ノさんにお願いしてＵ―ｔｕｂｅｒとして活躍するにはどうすればいいかっていうのを教えて頂いたんですよ！」
「相変わらずの行動力の塊だねぇ…どうせ、ボクも巻き込まれるんだろうけど。」
「私もですかねぇ…」
「やろうねぇ…」
　２ヶ月以上振り回され続けてきた結果訓練された部員はういはの思いつき＝自分たちもやるという構図に慣れきってしまっていた。もちろん俺も。
「で、それでですよ！やはり、今誰もが参入しつつあるＵ―ｔｕｂｅに割って入るには何かしらキャラ付けが必要なのではないかと月ノ先輩は仰っていたんです！」
「珍しくまともなこと言ってるね。」
「ですねぇ…またういはのことですから突飛なことを言い出すかと。」
「なので皆さんには一人一人、キャラクターとしての設定を付けさせてもらいます！」
「あ、ういはちゃんがつけんのぉ？」
「いやー…任せてもよかったんですけどそうしたら皆さん絶対渋るじゃないですかー？」
「それはそうだね。」
「なので私、今日授業を受けてる間に全員のキャラ設定を考えてきました！」

「授業受けてなかったんだぁ…」
「自慢じゃないですけど私、そこそこ成績いいので1日授業受けないくらいじゃダメージは少ないですからねー」
　アホの子っぽいういはではあるがその実文武両道を地で行くようななんでも出来るタイプらしい。ただ、何もせずにあのフィジカルや成績を維持できるとは思えないので、そのために努力もそれなりにしているのだろう。
「はい、というわけでキャラ設定一覧ですー！これを元にロールプレイしてもらいますからちゃんと読み込んでくださいね？」
「結構書いたんやねぇ…」
「これが一番大事です！って月ノ先輩が仰ってたので頑張りました！」
「その労力の使い方間違ってませんかね…いや、いいですけど。」
　リリさんの真っ当な呟きはういはの前には無力だった。
「はい、まず私ですね！私はアイドルライバーということになりました！理由はですね、私がアイドルに憧れてた時期がありまして、そのおかげで歌やダンスはかなり得意な方だから、という感じです！」
「はぇー…知らなかったぁ…」
　もちろん俺も初耳だ。

「なので普段の配信の他にも歌ってみたや踊ってみたを投稿する予定です！はい次！」
結構どういう活動をするかという所まで練ってきているとは思わなかった。やっぱりういはは根が真面目なんだろうか。
「黛さんは、パソコン得意って聞いたのでハッカーになってもらいます！」
「え、俺がハッカー活動をやってる事知ってたの？」
実は高校に入る前くらいから師匠の斡旋の下、フリーランスのホワイトハッカーとしてある意味バイトをしていて、そのお金で普段自分が使うお金を賄っている。あと一部は貯金に回しており、高校卒業後も施設に居させて貰うことになったらその分のお金は自分で負担するつもりだからだ。
「あ、そうなんですか!?全然知らなかったです！黛さん案外ワルなんですね…」
「いや、ういはが想像してるのはクラッカーだね。プログラムとかに忍び込んでデータを壊したり、上手く作動しないようにしたりって、色々悪いことをする人たち。俺がやってるのはホワイトハッカーで、頼まれたプログラムに弱い所がないか、セキュリティの甘いところがないかっていうのを調べる仕事。よく間違われるんだけど全然違うから。」
よくある勘違いのひとつで、説明にも慣れてきた。
「よくわかんないですけどなんか急に早口になって黛さん面白いですね！」

「黛、お前泣いていいよ…」
「まゆゆ…」
　先輩二人の暖かい言葉が余計に辛い。
「よくわかんないですけど、とりあえずパソコン関係のバイトをしてるって事ですかね？」
「うん、まあ、そういう認識でいいよ…」
「適当に決めた割には事実に即してるみたいで活動しやすくなったからいいんじゃないですかね？」
「まあ、そうだね。とは言っても詳しいことは企業の信頼に関わるからあんまり言えないんだけど。」
「まあ、あくまで設定なんでそれっぽいだけで大丈夫です！」
「まあ、そんな詳しいこと求められてないだろうしね。」
　しかし適当とはいえ知らないはずのことを当てられるとびっくりした。
　だが、びっくりどころで済まなかったのはこの後である。
「で、他の方々なんですけど、私が何となくそれっぽいなーっていう感じで決めさせてもらったんですけど…えぇーっと、アルスさんは魔法使い、リリ先輩は未来人、桜さんは宇宙人という設定で活動してもらいますね！ちょっと現実離れしてて難しいかもです、

が皆さんなら出来ると思ってるんでよろしくお願いします！」
「あ、あぃ…」
「はーい。」
「りつきん宇宙人かぁーはぇー…」
　まさかの全員正解（自己申告が正しいならば）だったのだ。偶然とは思うことが出来ず、もしやと思い小声でリリさんに尋ねた。
「ねえ、もしかしてういはってリリさん達のこと…」
「いや、それはありません。ういはさんは私たちみたいな存在がいればいいのに、そうだったら楽しいのに、と口には出している反面、かなり現実的な思考をしていて、自信の深いところではそんな存在がいるわけない、そんなのは想像上の存在だと無意識に考えているのです。」
「じゃあなんで…」
「それに関しては私も分かりません。ただ、今回のことはあまり深刻に考える必要はないと思います。適当に回したスロットがたまたま大当たりを弾き出した、そのような感覚です。まあ、ういはさんのことですから、このスロットがかなり大当たりを弾き出しやすくなってる、というのはあるかもしれませんが。」
「なるほどね。じゃあ、今回は俺としては別に何も気にする必要は無いってことか。」

「そうですね。まあ、全員その通りなのでＲＰはしやすいというメリットだけ見ておきましょうか。」
「了解。結局やるしかないんだね。」
「ですねぇー…。」

◇◇◇◇◇◇

数日後、ういはがＵ―ｔｕ部の先輩方や顧問の先生の許可を得て我々研究部の兼部が認められ、北高Ｕ―ｔｕ部所属Ｕ―ｔｕｂｅｒとしてデビューすることになった。Ｕ―ｔｕ部の公式チャンネルから新人デビューの動画を出してもらい、人気コンテンツに新しい風が、とファンからの期待値も高いようで既に告知動画の視聴回数は５万回を超えており、一学生としてはなかなかない注目のされ方である。
初配信は昨日桜さんとリリさんのが行われ、同接４０００を常時超える大盛況となった。既に２人とも登録者数が１万人を目前としており、また、初配信の割には落ち着いたトーンでの配信に多くのファンはさすが北高Ｕ―ｔｕ部だ、などと賞賛していた。
ただ、リリさんは通信状況が悪かったらしく１度目はほとんど声が届かなかった為枠を開き直し、結局復旧したのは桜さんの初配信が終わってから２時間後となりこの間を

繋いでくれたのは2年生の北高U―ｔｕｂｅｒの剣持先輩だった。
そんな不憫に見舞われながらそれでも同接４０００超は凄まじいことだと思う。
そして、今日は残った俺たちの初配信の日である。まずういはから始まり、アルス、俺で今日は終了の予定だ。
先輩方がしっかりとした初配信を終え、２日目の俺たちの配信を多くの人たちが楽しみにしている。というのもＴｗｉｔｔｅｒでかなり下の方ではあるがトレンド入りしていた上に、半分以上は感想ではあったもののかなり多くのツイートが俺たちの２日目の1年生への期待を全面に押し出したようなツイートが見受けられたからだ。
そんな様々なプレッシャーに押しつぶされないよう頑張りたいところではあるが…
「はぁぁぁ……俺さぁ……どうしたらいいかな……」
どうしてこうなった？

相羽ういはの憂鬱Ⅲ　②

ういはとアルスの初配信も終わり、遂に俺の順番が回ってきた。配信は時間を重ねるごとに人が増え、遂に５０００人もの人が俺の第一声を待ちわびている中、俺はマイクのスイッチをオンにした。

「はぁぁぁ……俺さぁ……どうしたらいいかな……」

記念すべきＵ―ｔｕｂｅｒ黛灰としての第一声は……ため息だった。

◇◇◇◇◇◇

時は遡り初配信リレー２日目１番手の相羽ういはの配信前日。

各種配信用のソフトの確認やＯＢＳについて事前に月ノ美兎さんから３人で教わる予定、だったのだが月ノさんに急遽呼び出しがかかったため樋口楓さんに教わることになった。

が、樋口先輩の説明が、この辺パーッとやって、とかこれをグッとやれば、などといった感じのもので隣のふたりは終始頭にハテナが浮かんでいた。一応助太刀にえるさん

に来てもらったがえるさんもえるさんで感性で話してきたためハテナが増えただけだった。
　そのため場所を改めて俺が2人に使い方や注意する点などを教え、ついでにまとめたメモにして渡しておいた。
「へぇー…黛さんほんとにパソコン詳しいんですね…」
　と言っていたあたり、リリさんの言う通りアルスや桜さん、リリさんのことについては知らないのだと思う。実際未来人夕陽リリと宇宙人桜凛月としての配信を同期3人で見届けたあとかけた通話ではういはが凝られた設定に感心しきっていた。
「お二人共めちゃくちゃ作りこんできたじゃないですか！厨二病かと思いました！あはは！」
　彼女たち2人からしてみれば本当のことを厨二呼ばわりされた訳だがそこには触れないでおこう。なんか桜さん黒っぽくなってたし。あれなんなんだっただろう。
　そんなこんなで迎えた俺たち2日目の初配信リレーだったんだけど、ういはが恐らく突拍子のないことをやり出すのは目に見えていたのでどうにかアルスと俺の常識人とういは、という構図にしたかった。ツッコミ役は多いほうがいいですよ、と剣持先輩がしみじみと語ってきたからね。
　そして始まったういはの初配信。当初北高U―ｔｕ部らしからぬ清楚な見た目と雰

囲気を醸し出していたため、遂に北高に清楚が現れた!などと言われていたんだけど…まあ、ういはが清楚とか笑っちゃうよね、とアルスに言ったら

「いや、まゆくん笑わないじゃん」

俺結構笑ってるつもりなんだけどな…

そんなことはどうでも良くて、ういはは何を思ったのかヘリウムガスを吸引し始めた。初配信っていうみんなに声や顔を覚えてもらう機会に声を変える奴がいるだろうか。ういはならやりかねないという覚悟がなければ危なかったね。

そんなこんなで比較的無事終わったういはの初配信。後は椎名先輩に続く第2の大福などとありがたいあだ名をデビュー前から貰っているアルスだ。既にネタキャラ扱いされつつあるし、さすがにこれ以上変なことはしないでしょ。やるとしたらセルフで頭をイジるくらいかな。

「本日はお忙しい中、お集まり頂き、ありがとうございます。この度、アルスアルマルは、とても痛々しい黒歴史なるだろう初ツイートをした件について謝罪と釈明会見を行いたいと思います」

そう思ってた俺を誰が責められようか。初手ヘリウムガスと初手謝罪会見の同期でしょ?俺なんにも用意してないんだけど。

この瞬間この3人の中で俺がこの2人をリードしていくっていうことが視聴者に伝

わってしまった。せめてういは1人対俺たち2人なら何とか一瞬張り合える瞬間が出来たかもしれないのに俺1人でういはの制御なんてできるわけが無い。これから朝起きてから夜寝るまで、もしかしたら寝てる最中にもういはに振り回される可能性がとても高い。俺の胃持ってくれよ…後で胃薬買ってきてもらおうかな。ほんとに。

◇◇◇◇◇

時の流れは残酷なもので、あっという間にういはとアルスの初配信が終わり俺の配信開始から30分程経過し、そろそろ締めに入らないといけない時間帯になっていた。どうやらコメント欄を見る感じだと既にまゆママだのママずみだの保護者枠は確定したらしく、俺の良くない予想は大的中してしまった。

最後に同期3人で企画をやりましょう!とういはが言い出した1人1コマ漫画を書いて3コマ劇場をやる…んだけど、ういは以外パソコンに絵を描くツールなんて持ってないし、アルスはいらすとやを駆使した画像を作っていた。俺はどうにかマウスで殴った。殴っときゃだいたいオチるでしょ。そもそも1コマ目2コマ目知らないのにどうやってオトせって言うのさ…。そんなことをボヤくとまたコメント欄がまゆママで埋め尽くされる。苦労を分かってくれるのはありがたいけど、見ず知らずの大人が俺の事

をまゆゆだのママだの呼んでくるのはちょっと気持ち悪いね。この辺も慣れるんだろうか。

◇◇◇◇◇◇

「お疲れ様ですー!!」
「おつかれさまー」
「お疲れ」
　無事初配信リレーを終えた俺たち3人は通話でお疲れ様会をしようということで通話を繋いでいた。ちなみに俺の乾杯ドリンクはリップノイズ対策用に置いてたリンゴジュースとガーナのボトルチョコ。
「それじゃあ僭越ながら、リーダーの私、相羽ういはが乾杯の音頭務めさせていただきます！」
　誰も何も言ってはいないが俺たち3人のリーダーはういはになった。なんだかんだ俺達を先頭に立って精神的にも物理的にも引っ張り続けてるのはういはだし、それが順当だろうということで異議なしでの決定だった。
　そしてもうひとつ決まったこととして、俺たち3人のグループ名は「ぶるーず」になっ

た。３人のイメージカラーが青系統だからぶるーず。安直だけど分かりやすくていいんじゃないかな。ひらがなにした理由は

やはりういはがひらがなの方が可愛くて馴染みやすいと言ったからだ。しかし、ブルーズだといわゆるブルースなどに検索被りするから良かったかもしれない。

まあ、そんなわけで俺たちぶるーずのお疲れ様会が始まる。

「よっ！」

「ぶるーずとして長く楽しく活躍出来る事を祈って、かんぱーい！」

「かんぱーい」

こうして改めてぶるーずの決起集会が始まった。

俺はその後配信した。

◇◇◇◇◇◇

「黛さんずるいですよ！私あの後すぐに寝ちゃったのに…ふあぁ…」

今日も登校中に捕獲された。４０分足らずとはいえ初めての配信活動。ういはなりに緊張して気疲れしたんだろうか、珍しく寝過ごしそうになったんだろうか、珍しく寝癖がついていた。

「ういは寝癖つきっぱなしだよ」
「え、まじかぁ…急いでたから気づかなかったわぁ」
何となく寝ぼけているのかふわふわしてるういはの後ろからいつも通りもちもちしたのが来た。
「ういはちゃんボクの櫛使う？焼け石に水かもしれないけど…」
「ありがとうございますアルスさぁん…なおりますかねぇ…なおってます？」
「うーん…ダメっぽいね。」
なかなか頑固な寝癖は櫛で梳かす程度じゃ太刀打ちできなかった。するとその時
「可愛い後輩がお困りのようですねぇ、夜見のマジックでなおして差し上げましょう！」
「それとも私の薬使いますか？１発でどうにか…これ…あれ、これ何の薬だったっけな…」
１ヶ月程先にデビューしたＳＭＣ組の夜見さんと葉加瀬さんがそれぞれの特技で助け舟を出してくれた…けど多分良くて現状維持運が悪けりゃ髪が爆発するとか身長が縮むとかありそう。
「ありがと～でもトイレでなおせるから大丈夫！アルスさんしてもらいなよー」
「うぇ!?なんでボクなのさ！寝癖ついてないからいらないよ！」
「じゃあ今度寝癖ついてる時はやってあげますねぇあ～」

「任せろぉー」
「い、いらないよ…」
しかし葉加瀬の自身は一体どこから出てくるんだろうか。

◇◇◇◇◇◇

「いやぁ～大変やったねぇ～」
「そうですねぇ…わたしに至ってはもう…通信環境が悪いとかいう次元突破してましたもん…」
今日も放課後は誰に言われるでもなく部室に集まり、２日間にわたる初配信リレーが無事（？）終わったことをお互いに労っていた。
リリさんはほんとに大変だったと思う。珍しく初配信後は落ち込んでいたし、剣持さんにはほんと助けられた、としおらしくなっていた。さすがに俺もあの状態のリリさんを弄ろうとは思わなかった。
「絶対ＷｉＦｉ新しいやつ契約します。なるはやで。」
「ボクは強い回線のところをたまたま契約してたから助かった…」
ちなみに俺は師匠がどうせパソコンやるんなら強い回線持っとけ、という鶴の一声、

及び出資により施設にはつよつよ回線が通っている。
　ちなみに何故か防音室もある。なにかご都合主義のようなものを感じたが、損することでもないので有難く使わせてもらってる。
「月ノさんに報告してきましたぁー！お疲れ様ってお菓子とジュース貰ったのでみなさんでパーティしましょ！黛さん、机の上のもの片付けて貰えます？」
「了解。リリさん、テーブルに伸びてないでシャキッとしてくれる？片付けるよ？」
　先程からテーブルに根っこでも生えたかのようにリリさんがベチャっとくっついていた。
「私がこうなってようとじゃまになっとらんやろがい！そもそも黛さんじゃ私動かせないんじゃないですか？」
「ういはがいるじゃん」
「他力本願っ!?」
「黛さん貧弱だから仕方ないですねぇ、ういはちゃんがやってあげましょう！」
「いやいやいやいやいや大丈夫です、動けます、動けますから、未来人自分で動けますからーほらほらーリリちゃん俊敏ーリリチャンカワイイヤッター」
「おおー普段から未来人を名乗るとはなかなかプロ意識が高いですね…私ももっとアイドルらしく振る舞わないと！」

「あははは……」

後々話を聞いたら動揺して口を滑らせてしまった。体中の穴という穴から汗が吹きでて、本気で終わったと思った。あの時ういはちゃんが私に未来人のＲＰを授けてなかったらほんとにやばかった。

焦りすぎて最後の方変なこと言ってたしあの慌てっぷりは見てて面白かったからヨシ。

相羽ういはの憂鬱Ⅲ　③

デビューしてから1週間ちょっと経った。夏休みは中学生の時よりも短くなったのに課題の質と量は増えていて、要領よくやっていかないとすぐにキャパオーバーしてしまいそうだ。それに加えてこのうだるような暑さ。元からあまり気温の変化や雨風など自然の猛威には全くの無力な俺が登校という名のハイキングなんてできるはずもなく、自由参加となった超常現象研究部には顔を出すことなく、施設にこもって子供たちの相手をして、課題をノルマ分、気が乗れば翌日のノルマも少し手をつけながら残った時間は配信と睡眠というライバーと学生の2足のわらじを完璧に履きこなしていた。ういはは配信時間こそ長くないものの、ゲームや料理、雑談など色んな企画を行っている。アルスはなんかまた謝ってた。

◇◇◇◇◇◇

「あ、始まりましたか？」

「これでいいんじゃない？」

満を持して同期のぶるーずで初コラボ配信を行うことになり、今日は各々の家からマイクラをプレイしよう、ということになった。

北高U―tu部には共同のサーバーがあり、配信外でもそのサーバーを使って遊ぶことも出来る。これのおかげで予期せぬ突発コラボが生まれたり、大型コラボを企画して予定合う人全員で攻略したり、などと北高U―tu部の目玉コンテンツになっているのである。

…しかし、ういはがやろうと言い出したものの何やるかは全くの不明である。……なにやるの？

「ひとまず観光でもしましょう！」

というわけで俺たちは北鯖を色々見て回った。先輩たちがサバイバルのみでこれまでの建築物たちを作り上げていたのか、と思うと生徒であるものの配信者として尊敬の意を抱かずにはいられない。

途中同い年の先にデビューした人達とばったり遭遇したりなんやかんやあったりしたが、それなりに面白い配信になったんじゃないかな。他の人の建築物を壊したり景観を破壊したりしてはいけないからクリーパーには今までで一番緊張したけどね。

俺も先輩方に負けないよう個性的な建物を…自発的に建てようとは思わないけどぶるーずで、とか大型コラボで作っていく機会があればやりたいな。拠点はひとまず隠れ

宿みたいにするつもりだから大きな家を建てるつもりはないしね。
配信後３人で反省会と称して通話を繋いでいたけどアルスもかなりこの世界でやり込みたいような感じだったのでこれからマイクラ配信が増えそう。コツコツやるのはアルスの性格にも合ってそうだしね。
ういははあんまりゲームをがっつりやるつもりではないらしいけどどうだろう、思いつきで色んなことをやるから無茶ぶりに対処できるように準備しておかないとな。

◇◇◇◇◇◇

「暑い…溶ける……」
「あづー…ボク煙とか出てない？焼けてない??」
「もう、２人とも鍛え方が足りないんですよ！ちゃんと普段から運動して外に出てないからこんなことになるんですから！ほら、シャキッとして!!」
「そもそもさ、この暑さの中ここまで俺とアルスが来れたことを評価してくれてもいいんじゃない？」
「そおだよおぅ…」
コラボ配信から数日後、超常現象研究部の活動で駅前に集合させられていた。無茶ぶ

りに対処しなきゃと考えてはいたけど配信以外でも振り回されるとは…真夏のこんなに暑い日にわざわざフィールドワークをするのは非効率的すぎる、もっと涼しくなってからにしないかと提案したものの、それはういはによって却下された。曰く、

「黛さんそうやって先延ばしにして結局いつ言っても家から出てこないじゃないですか！なので明日で決定です！いいですね！返事ははいかＹｅｓ以外認めません！」

だそうな。まあ、実際冬に提案されていたら寒いからと言って断っていたけどそんな四季の極端なところで外を歩き回る活動はどう考えても非効率的そのものだしピンピンしてるのはういはだけだと思うんだけど。

しかし悲しいかな、一度やると決めたういはの心を動かすことができる人間はこの世にはいないのである。アルス？俺？弾き飛ばされて終いだろう。俺たちの担任は既に制御を諦めて俺たちに任しているけど一度も成功していない。例えあの月ノ美兎先輩をもってしてもういはを制御するのは難しいかもしれない。神？知らん。そんなもの俺は信じてない。

こうして半ば強制的にこの夏の暑さを思う存分に味わうことの出来る地獄の散歩に引きずり出された訳だが…

「しっかしこんなに晴れますかねぇ…未来より暑いかも」

「こんな地球が暑いとは知らんかったぁ…」

未来人も宇宙人も現代の地球の暑さにやられていた。多少俺よりかは立てている分ましなのだが…問題は横のこれだ。

「あ〟ぁ…○×＊％。＃＆…」

アルスが完全に溶けきって元から怪しかった滑舌ももはや言語としての形を成していない。良くリスナーからもちもちした滑舌と言われているが熱でとけるところまでもちもちにならなくてもいいんだけど。

ほら、ここまでアルスがやられてるんだからういはも勘弁して…

「何言ってるか分からないですけどとりあえず行きましょ！歩いたら元気になりますからねー」

してくれないんだね。憐れアルス。…と俺。

◇◇◇◇◇◇

ただフィールドワークとは言いつつも我々超常現象研究部は超常現象を研究する訳では無いので、高校生の夏休みらしいことをやることをういはが勝手にフィールドワークと命名しただけだった。

なので第1回のフィールドワークは近くのカフェで作戦会議を行うこととなった。

議題は「高校生の夏休みらしいことと言えば」
「じゃーリズムに乗って行きましょう！せーの、プール！」
「…え、ボク!?…えっとえっと…花火！」
　ういはは会議とマジカルバナナの違いを分かっているのだろうか。
「ういは、カフェに来てるんだしあんまり盛り上がるような事はやめとこう。普通に案出ししていこうか。例えば夏祭りに行く、とかどうかな。」
「そうですね…ちょっと楽しくって舞い上がってましたすみません…それはそれとして夏祭り頂きです！」
　一応店員さんらしき人に頭を下げておくと笑顔で大丈夫だと伝えてくれた。ありがとうございます。
「なんか私たち蚊帳の外になってへんかこれ…」
「ですね…ういはの暴走のとばっちりをアルスさんが受け、黛さんが制御する…我々、いらなくない「お2人は何か案ありますか？去年どのようにしてたとか参考になりますし！」
　ういはの得意技、キラーパス。
「びっくりした…そうですね、バイトとかどうですか？」
「そやねー、高校生らしいと思う！1日だけのもあるっちゃんね」

「なるほど…バイトいいですね！ちなみに去年の夏休みお２人はバイトされたんですか？」
「私は近くの球場に単発で行ってました。仕事少ないし休憩時間長いので楽でしたよ？」
「私はやってなかったけど友達がスーパーの着ぐるみ着て風船配っとったけんちょっかいだしに行ってた…えへへ」
「ほおぉ…ちょっと詳しく教えて貰ってもよろしいでしょうか！」
「よかろぉ！まず場所はぁ…」
結局一日目はこうして案を出したり煮詰めたりして終了したのだが、それにしてもかなりの量が出てきた。２日に１個消費してギリギリ間に合わない程の計画がういはのノートには書き記されている。プールに花火に夏祭り、バイト、などなど…しかしういはが何も言わずに書き足していた虫取りは果たして高校生らしい行為なのだろうか。

◇◇◇◇◇◇

さて、そんなわけで俺は今近くの山の中の公園にいる。そう。例の虫取りである。そして例にももれず暑い。そんなわけ、に俺が山の中にいるまでの過程が省略されること

になるとは数ヶ月前の俺には到底考えられなかった。ただ、当初回ってきた予定では中央運動公園に集合し、それから山登りをすると書かれていて４人全員からやめてくれと秒速で返信が来たのはまた別の話。

「ちぇー…みんなで山登りしたかったのに…」

「そんなことして生きていられるのういはだけだから…」

「いやー、山登りとは言ってもこの山低いですし小学生もよく居ますよ？少年野球の新年最初はここに登ったってクラスの人も言ってたんですし。」

「いや、それにしても間違いなくボクたちの集合場所からは行かないでしょぉ…徒歩１時間かかるって書いてあったじゃん…」

「最初リリさん無言でグループ抜けたもんね」

「当たり前でしょう!?こんな猛暑の中１時間も山登りできるわけないでしょうが！…ういはろから鬼電来たので戻りましたけど…」

「こわぁ…そりゃ戻るわな…」

「りっちゃんも気をつけなよぉ…なぁにされるかわかんないんだもん」

「やだなぁアルスさん、そんな私が化け物みたいな言い方辞めてくださいよぉ！」

　実際フィジカルモンスターだから間違ってはないんだよなこれが…

「黛さん何か失礼なこと考えてません？」

「あ、え、いや？・そんなことないよ？・」

宇宙人に魔法使いに未来人までいるけど、この中で1番人間離れしてるのはやはりういはに間違いない。

「さ、行きましょう！・疲れてる場合じゃないですよぉ？・今からハイキングですから！・」

間違いない。

エンドレスサマーⅠ　①

そんなこんなで始まったういはによる夏満喫計画、という程の計画性を持ったものではなく、ただがむしゃらに書き連ねられたリストを消費すべく集められてから数日。未だ俺のスマホが相羽ういはからの着信を示すことはなく、もしややりたいこと集めるだけ集めて1人で、もしくは俺をハブって消化し始めてるのではないか、なんて考え始めた気だるいが至ってごく正常なお盆手前の夏の盛りの日の事。

施設の子供たちと一緒にテレビで甲子園を観戦していた。俺に全く縁もゆかりも無い県同士の戦いだけど、施設の子達につられて負けている方を何となく応援していると、俺のスマホが着信音を高らかに叫んだ。

……ういはだ。

「黛さーん！　お暇してますかー？　してますよね！　なので2時に駅前集合でお願いします！　ではまた後で！」

一方的に自分の要件だけを話すだけ話したら即切られた。

と思ったらすぐにまた着信音。これもういはからだ。

「すみません、言い忘れてましたが水着一式とお金持ってきておいて下さいね！　では

また！」

行きたくない。

◇◇◇◇◇◇

「黛さんおそいですよー！　やる気が見えないですよ！　わたしを待たせるとはどういうおつもりなんですか！」

ちゃんと15分前に来たと言うのにどうして毎回俺は最後になるんだろうか。というかアルスが俺より早いのは本当に解せない。

「は？　やんのか？　ボクのことなんだと思ってんだぁ？」

「つるつる饅頭」

「はぁー!?　お前っ！ぬぅおおおお！」

どうどう。

「それじゃ出発しましょ！　もう5分後に電車来ますから急いで行きますよ！」

「一応聞いておくけど……どこに？」

「決まってるじゃないですか、市民プールですよ！」

「なんでプールなのさ？」

「いいですか？　黛さん、夏には夏らしいことをしなきゃ行けないんですよ！　高校1年生の夏休みは人生で1度きり！　このチャンスを逃してしまったらもう二度と戻ってこないんですからね？　だから今やるんですよ！」

1度きりね……あとなんか今のういはの言い回しどことなく剣持さんぽかったな。

◇◇◇◇◇

さて、そんなこんなで俺たち一行は市民プールに着いたわけだけど……遠くない？いや、まあ俺たちの交通手段と財政状況で行けるプールはここしかないけど。

一応南の方に複合スパリゾート的な施設はあるんだけど１７００円という大金は高校生の俺たちにはかなり辛い。

それに東西の移動は電車が通っているから結構便利なんだけど、南北の移動が結構不便なんだよね。

そこに行くにはバス乗り継ぐか電車とバスで向かうしかないから、ただでさえ高校生には高い施設利用料に加えて交通費も重なると自ずと選択肢からは除外される。

その点この市民プール、と言うべきかもはや庶民プールという方が似つかわしいような、５０ｍプールと浅い幼児用プールがあるだけのここは５００円で利用出来るから

ね。

さっき言った施設のようなウォータースライダーも温泉も屋内プールも売店もデッキチェアは何も無いけど、ういはの言う「高校1年生の夏休み」らしいプールはこの庶民プールじゃないかな。

そんなことを考えながらういはの誘いを断り、先客の合間を縫って数少ない日陰争奪戦に勝利した俺と到着後ういはに物理的に振り回されてダウンしたアルスの所へういはが幼い女の子を連れてやってきた。

迷子……かと思ったけど隣にいるリリさんと桜さんが申し訳ないような恥ずかしいような、困惑方面の様々な感情を煮詰めた顔をしてるから多分違うな。

「この方たちが私のお友達です！　黛さんに言ったらなんでもやってくれますからなんでも言ってくださいね！」

「はーい！」

どうやらその辺にいた子たちを手懐けて連れてきたらしい。多分だけど一般的に友達ってそんな扱き使う使われるみたいな関係性じゃないと思うし、このことをエピソードトークとして配信に乗ろうものならなんか怖いことになりそうな気がする。剣持さんとか。

◇◇◇◇◇◇

「さて、というわけで前回少し話しましたけど夏休みの行動計画を立てていきましょう！」
「あれ、前回何するかとか決めんかったっけ？」
「あの時は何するかしか決めてないので、今日は具体的な日程を決めていこうかと思いまして」
「あー、確かに。お祭りとか気が向いた時にできるものじゃないものもありますしね？」
「そうだね。この辺だったらお寺か神社の夏祭りになると思うけど」
「たしかぁ……うんどうこうえんの☆＃○×＋％▪＄÷～……」
「待ってアルスほんとにわかんないんだけど」
　プールの疲れも相まってついにアルス言語野が消失してしまったのだろうか。
「あー、そういえばそっちだと盆踊りもありますもんね……アルスさんナイスです！」
「ういはもういはでなんで聞き取れんのさ……」
　やだ、私の同期テレパシー使えちゃう？
「テレパシーじゃないですよお黛さんの耳が悪いんじゃないんですか？」
　あ、テレパシーじゃないわ。ただの思考盗聴だな。

「いや俺じゃないでしょ。現に桜さんもリリさんもアルスの言葉聞き取れてないでしょ？」
「あはは……ちょっとモチモチしてて聞き取れへんかったかなぁー……」
「黛さん大丈夫です。あのアイドルがおかしいだけですから」
　良かった、これからアルスの発言一生聞き取れないかと思った……まあ今も聞き取れないこと結構あるけど。
「まあ、アルスさんは置いといて日程決めていきましょう！　皆さん習い事とかってありましたっけ？」
「俺はないね。みんなは？」
　3人も口を揃えてないと告げる。
「あ、でも夏休みですし最低週2回、出来れば3～4回は配信したいなって思うんですけど……どうすかね？」
「まあでも夕方に解散したら夜の配信できるじゃないですか？」
「いやぁ……私外出て活動した後にまた配信する体力あるかなぁ……あはは……」
「多分だけど俺とアルスはこのまま帰ったら明日の夜まで寝るくらいは疲れてるからね？」
「ええー、じゃあ予定は最大週に4回までにしておきますね……」

お預けを食らった大型犬のように分かりやすくしょぼんとなるういは。ブンブン振っていたしっぽが悲しげに垂れていく様が見えたまである。というか毎日外に出ようものなら始業式を待たずに人生の幕が降りかねない。体力的な問題で。

「いやぁ……それでも十分多いと思うんすけどね……黛、しんどかったらいつでも言うんだぞ？　優しいお姉さんが嘲笑ってやるからな？」

「最悪じゃん。この前スマブラで俺に舐めプされた上に負けて萎え落ちしたからってそんなヤケにならなくていいんだからね？」

「はぁ？　今それ関係ねぇだろうがよぉ！」

「ちなみにですけど黛さんこの前、おふたりのスマブラの動画を部活全体のディスコに貼ってましたよ？」

「はぁ!?　黛ッ!?　お前ッ……黛イ！」

「フン」

「フンじゃねぇよ！　ドヤ顔してんじゃねぇよぉ！　黛お前覚えとけよ！」

よし。

◇◇◇◇◇◇

「辞めます？　いいっすよ辞めても」
はぁぁぁぁぁぁ……どうしてこうなった？

事の発端は先日のスマブラ事件まで遡る。
経緯としてはＴｗｉｔｔｅｒ上でのやり取りの中でかかってこいよ、などとリリさんが煽るもんだからスマブラで決着を付けようと言うことになったんだけど、まあ、結論から言うと……めちゃくちゃリリさんが弱かった。
具体的には舐めプをしようとして最後の切り札をリリさんのいないところに打ったらそこに飛び込んできた。途中からは煽るのも申し訳なくなり、今のいいじゃん、などと言っていたらリリさんのプライドを粉々にしてしまったらしく復讐としてホラゲーを押し付けられたのである。
まあ、先輩もいるディスコに貼ったのもあるけど。というかそれが５割くらいある。
そんなこんなで半ば無理やり配信枠を取らされ、プレイさせられてるんだけど……正直なところ俺はホラーゲームがあまり得意では無い。
そしてこのゲームはリリさんが既プレイということもあり定期的に煽ってくる。ちなみにリリさんもホラーゲームそのものは苦手である。そのくせ煽ってくるのだから非常にタチが悪い。夕陽リリを許すな。

そんなこんなで罰ゲーム的な感じでホラゲー配信をさせられているのだが、そもそも昨日は前から言っていたバイトをやってて割と疲れているのは疲れている。やりたいことリストのバイトをやるついでに、盆踊りに着る浴衣を買うためのお金を稼ぎましょう、とういはが言い出したこともあって単発のバイトをしていたのだが、その内容はスーパーで着ぐるみを着てひたすら子供に風船を渡す、というものだった。当然この炎天下俺（とアルス）が耐えられるはずもなく、開始３０分で２人揃ってダウン。

俺とアルス２人で店長さんに話して、代わりに店舗のホームページと運用マニュアルを作成、これで風船配りのバイトの埋め合わせという形にしてもらった。アルスに案を出してもらいながら俺がページを作成していくという形でやったのだが、完成したホームページを見せるといたく感動した様子で喜んでくださり作った側としても冥利に尽きる。

いやー、パソコン詳しくてよかったー。

「黛さん？　進んでませんよ？」

「いやー、パソコン詳しくて良かったなって」

「何の話ですか。現実逃避しないでください。ほら、続きやりましょ？」

ほんっとにやりたくない。

今ゲームはというと第二夜が進行中なんだけど、昨日居た先輩キャラがレジに居な

い。軽く探してみたんだけどトイレにも店内にも居ない様子だし、あとはバックヤードだけだけど……

「こっち行くの怖い……とりあえずタイムカード切るか」

「怖いってぇ……「言ってない」……言いましたよねぇ？　あれれぇ？」

こいつ揚げ足ばっかり取りやがって……自分が安全なポジションにいるからって……

バァン!!

探していた先輩はロッカーの中に隠れていたらしく、突然大きな音を立てて脅かしてきた。

「……やめ……よ？」

「辞めますぅ？　いいっすよ辞めても」

「いいっすよ？　第二夜、なんも起こらずこんな中途半端なところで。もったいないっすけどねぇ、いいゲームですけど。まあしょうがないっすねぇ黛さんが辞めたいって言

うなら……しょうがないっすよねぇ！　ゲーム的に何も始まってないのに……起すら起きてないのに……黛さん辞め……」
「じゃあやる。やる。やるから」
「おうおうおう、あ、やるんですかぁ？」
「1度やったゲームだからね」
「さっすが黛さん！　ははっ」
「あぁマジ……」
絶対泣かす。こいつ。覚えとけよ。

エンドレスサマーI②

リリさんとホラゲー配信をした（させられた）翌朝、体力的にはともかく精神的に疲弊しまくっていた俺がMPを回復させるべく惰眠を貪っていると例のごとくういはからの着信によってたたき起こされた。

「おはようございます、黛さん！　健康的な生活には朝から自然と触れ合うことがかんじんなんですよ？　黛さんほっといたら部屋の中に根っこ生やしてきのこになっちゃいそうじゃないですか」

「誰が陰気でじめじめした男なのさ」

「まだそんなこといってないじゃないですかー。黛さんったら卑屈ですねー。そんなんじゃモテませんよ？　それはともかく今から2時間後に森林公園集合で！　動ける服装で……あ！　でも長袖長ズボンで来てくださいね！　それじゃ！」

……まだって言った？

◇◇◇◇◇◇

「全員集合しましたね！　遅刻者０とは大変喜ばしいことです！」
　というわけで森林公園に来たんだけど……熱い。暑い超えて熱い。それもそのはず、こんな夏真っ盛りの日に長袖長ズボンで直射日光の下に晒されようものならこもりまくった熱と容赦なく照りつける太陽のダブルパンチで呼吸はおろか生きてるだけでＨＰがゴリゴリに削られてる気分がする。というか実際に削られてる。まだ８時半だというのにこの暑さだと昼には体が干からびていそうまである。
　ういはがなぜあんなに元気なのかほんとに度し難い……。
「まずは皆さん一人１セットこれ持ってってください」
「虫取り網とかご……ういはちゃん？　これ、何すると？　もしや……」
「やりたくないよボク!?」
「君たちのような察しのいいガキは好きだぜ、虫取り大会です！」
　虫取りか……いや、虫に対してそこまで嫌悪感があるわけじゃないけど好き好んで触れ合いたいわけじゃないし……あと捕まえるみたいな俊敏な動きできないし。
「今回の様子は後々私のチャンネルに動画としてアップするつもりなのでみなさん気合入れてくださいね！」
「ちょ、え？　そんなこと聞いてないんやけど？」
「あれ、言ってませんでしたっけ？　まあいいですよね！　カメラは順番こに回してい

きますからねー」
「何も良くないよぉ……」

◇◇◇◇◇◇

「第1回！」
「「「「北高U―tu部虫取り大会！」」」」
「はい！　ということで始まりました第1回北高U―tu部虫取り大会に参加してくれたメンバーはこちらの方々ですー」
「はーい、未来人の夕陽リリです」
「こんりつきーん、桜凛月ですー」
「どーも、黛灰、どうぞよろしく」
「アルスァルマルデウ」
「せーのっ！　ういはろー！　アイドルライバーの相羽～ういは～ですー！」
「一人挨拶聞き取れませんでしたが、今日は何するんですか？」
「今日は皆さんには虫取りをしてもらいます！　ルールは簡単、セミ、カブトムシ、クワガタであれば種類は問わないので、今から5時間で一番多く集めた人の勝ちです！」

「「「5時間!?」」」
「あれ、足りませんでした？　皆さんがそう言うなら日没まででもいいですよ？」
「違う違う、一時間でも俺たち死ぬから」
「え～、一時間じゃ見つからないかもじゃないですか」
　見つからなくてもいいんだよ……まあ、5時間あるとはいっても間の2，3時間は適当に休んでおけばいいしね。お互いに見張るわけじゃないし……
「ちなみにさぼる人がいそうなので、ある程度同じような場所を探してもらいますし、念のためお互いの場所や移動速度などはアプリを使って監視できるようになってます！
　黛さん、アルスさんの考えそうなことはお見通しですからね？」
「「う、うわぁ……」」
　俺……生きて帰れるかな……

◇◇◇◇◇◇

「はい、とりあえずオープニングはこんな感じでいいですかねー」
「ういはちゃん、5時間って本当う？　ボク、死ぬよ？」
「大丈夫ですよ！　人間そんなに脆くないですから！　ぎゅってしたらパンってなるか

もですけど疲れるくらいじゃ死にませんから～」
　ぎゅってしたらパン……？　普通人間ってそんなことにはならないでしょ……
「ういはちゃん例えが怖いよぅ……」
　定期的に人間を辞めますがお使いの相羽ういはは正常です……ってとこか。何言ってんだ俺。
「ういはさん、ちょっと質問なんですけど」
「はいなんでしょう？」
「カメラ交代でやるーって仰ってましたけどどういう順番とか決めてます？　いや、決めてないならないで全然いいですけど」
「あー、決めてなかったですね……ＬＩＮＥのくじ引きでいいですか？」
「そうですねー、悪くないんじゃないですか？」
「そやねー、すぐできるしね」
「ボクも……賛成……」
「ういは、早くやろう。アルスがそろそろ溶ける。……俺も」
　アルスが著しく体力削られてるせいでバレてないかもだけどそろそろ俺もやばい。なんでずっと日差しの下でやんの？　早く日陰入ろうよ……
「確かにせっかく集まったのに最後まで楽しめないのは可愛そうですもんね！」

「いや、そうじゃないんだけど……いやもうそれでいいや。早くやろう」
「黛さんが説明諦めて適当になってる……はは、逆にやる気ある人みたいになってますよ?」
「1秒でも早く終わるならやる気あるフリでも何でもするよ……」
「大分重症っすね黛さん……普段から外でないからですよ?　夏休みは外出増やしたらどうっすか?」
「そもそも今の環境下で外出る体力がないから引きこもるしかないんだってば。夏場歩き回る俺見たことないでしょ」
「そりゃ黛さんと知り合ったの最近ですからねー」
「あぁ、そうだった……ややこしいね、それ」
　俺とリリさんは幼なじみとまでは行かないが俺が施設に入ってしばらくしたくらいの時の唯一施設外の遊び相手……という存在しない記憶を俺に植え付けることでういはに接触しようとしていたらしい。
　正直俺としてはリリさんと遊んでた記憶思いっきりあるからそんなこと言われてもあんまり実感は無いから言われるまで普通に忘れてたんだけどね。
「ルーレット出来ましたよ!　じゃあ早速回しますねー」

◇◇◇◇◇◇

「中間発表〜！」
「いえーい（低音）」
「どんどんぱふぱふー」
「やんややんやー」
「わぁー」
「皆さんテンション低いです！　やり直しさせますよ！」
「いえーい!!!」
「どぉんどぉんぱぅふぱぅふぅー!!」
「やんややんやー!!!」
「わぁー!!」
「やれば出来るじゃないですか！　というわけで中間発表行きましょー！」
「ま、待って……息が……もたない……から……」
　虫かごがそろそろいっぱいになるかもしれないということで、２時間強が経ったところで中間発表を行うことになった……のだが、ういはからの要求につい答えてしまった結果酸欠になった。ちょっ、誰か酸素缶持ってない……？

「はい、黛さんが落ち着いたところで捕まえた虫の数を発表して逃がしていきましょう！　まずはアルスさんお願いしまーす」
「あい、ボクは3匹とれたぉ」
　……だいたいみんな3～5匹程度捕まえたみたい。まあ、そんな簡単に捕まえられるものでもないし、全員ちょっとビビってた節があるので（ういはを除く）少し数は控えめとなった。そしてラスボスういはだが……既に虫かごがすごいことになってるんだよなぁ……
「はい！　最後私ですね！　ちょっと多いので逃がしながら数えますねー」
「いや、ういはさん多すぎません!?」
「うわぁ……あっこまでいくとちょっと気持ち悪いなー……アルスちゃん？」
「ひぃぃ……おかしいって……」
　アルスが正しい。
「いーち、にーい……はい！　全部で14匹です！」
「つえぇぇ……もうお前の優勝でいいよ相羽ういは……」
「いかれてんだるぉ……」
「はい、ということで引き続き後半戦も頑張っていきましょう！」
「「「おぉー……」」」

◇◇◇◇◇◇

「まゆー」

後半戦も残り３０分を切った頃、桜さんがウキウキしながら呼びかけてきた。嫌な予感がなーんとなくする。

「どうしたの？」

「いやー、この子他のカブトムシとかと全然形違うからなんなんかなぁって思って……」

そう言って桜さんが渡してきた虫かごの中には上下に大きな２本のツノを持ち、手のひらを優に超えるサイズ感のある、ムシキングでつよさ２００の世界最大最強の奴がいた。……あれ、でもヘラクレスってこんなんだっけ？

「やばっ、ヘラクレスじゃんこれ」

「ヘラクレス？」

「これ外来種っていうか、そもそも日本には自然で生息してない種類で飼育されてる個体しか居ないはずなんだけど……」

「はぇー、見つかっちゃ不味いやつ？」

「不味いね。ういはに言うと新しい問題増えそうだし……あ、あそこの金髪のお兄さん

に聞いてみる？」
「そやねー、あの人も虫取りに来てるみたいやし相談してみるかぁ」
　さすがに野生環境に生息していないだろうからリリースは不味いだろうしどうしたらいいか分からないので近くにいた人に助言を求むことにした。
「すみません、ちょっと聞きたいことがあるんですけど」
「はい、どうされ……あ、りつきんじゃん！　それと黛くん……だっけ？」
「はい、そうですけど……あ、成瀬さん？」
　声をかけてみたお兄さんは部活の先輩である成瀬鳴だった。こんな偶然があるんだな……って思ったけどういはと知り合ってから偶然と思いたい色んな出来事があったし今更感はあるな。
「そうだよー、黛くんとりつきんも虫取りに来たの？」
「そうなんよぉー、ういはちゃんに誘われて来たんやけどさぁー、ちょっとこれ見てくれん？」
「んー、どしたん……っ!?　ヘラクレスリッキーブルー!!??　うっそだろおい!?　え!?　なんでここに!!?」
　アイエエエ！　ナンデ!?　ニンジャナンデ!?
「いやー、なんかその辺におったっていうか……」

「いやいやいやいやいや……あー、でも飼い主さんが捨てたとかそんな感じかもしれないし……」
「どうしたらいいとかはある？」
「基本的に日本の生態系で外国のカブトムシは生きていけないはずだから一旦俺んとこで預かった方がいいかな？　別にりつきんたちで飼うって言うなら全然良いしなんなら色々設備貸したげるけど……どうする？」
「んー、俺は施設だし勝手に生き物飼えないからパスかな」
「私も世話する余裕そんな無いかもしれんしなぁ……ういはちゃん達は？」
「アルスとリリさんは基本的にそこまで虫好きじゃないしういはに話したら学校で飼おうとかまた色々言い出しかねないから成瀬さんに飼っといて貰うのが一番いいと思うかな」
　どうせ可愛いじゃないですか！　部のマスコットにしましょうよ！　って言い出して俺たちが世話をするオチが見える。もはや聞いたことある。
「おっけ、んじゃ俺貰ってくね？　……ひひリッキーブルーだぁ」
「ありがと、こっちとしても助かる」
「いやいや！　まさかこんな形でリッキーブルー手に入ると思わんかったからラッキーでしかないよ……ほんとに貰っていいんだよね？」

「うん。お願いするね」
「了解！　大切に育ててやるからなー」
　そう言いながら成瀬さんは自分のカゴに入れて帰って行った。背中から喜びが滲み出てるんだけど大丈夫かな？　注意散漫とかで車に轢かれそうな勢いだもん。
　……そういや今ってカメラマン役リリさんのはずなんだけど変わってからほとんど見かけないな。どこに行っｔ……

「喰らえぇっ！」

「うわっ!!??」
「わっ!?」
「撮れ高ありがとうございます！　黛さぁん？」
　あいつ……姿を現さないと思ったら突然目の前の茂みから俺に向かってセミをぶん投げて来た……いや、ほんとにびっくりしたしなんなら隣にいた桜さんも驚いてたし……。俺の目の前で腹抱えて笑ってやがる。あのクソガキ絶対許さねぇ……
「おい、夕陽」
「な……ふふっ……なんですか、黛さん？　なははは！」

「さっきそこにカエルいたんだけど……俺も投げていいよね？」

「誠に申し訳ございませんでした」